

5  
804  
7止



卷  
964  
72

卷九百六十四



○正シク内仕ノ人語ル。君上ニ。毎月十七日毎ニ。權現様御遺訓  
 ト云御書物ヲ御聽聞ナリ。其式。御上段ニ御坐アルニ。御小性頭取  
 ノ役ニテ。コレモ御上段ニ登リ。御對坐ニテコレヲ讀。上ニ。御手ヲ下  
 サセラレ。御聽アリ。其間イツモ一時バカリセ。予問フ。其御冊紙葉  
 何ホドカアル。答フ。筒口三歩ニ踰へ。四歩バカリト見ユ。又問。世ニ御  
 遺訓ト云者有リ。是等カ。答。否。推量スルニ。其本トハ異ナリ。誠  
 ニ御子孫ヘ示サル。御訓戒ト思ハル。某輩モ遠ク御次ニテ聞ケド。  
 子細ニハ心得ラズ。

右大将様ニモ御聽聞アレド。是ハ毎月ニアラデ。時々御聽アリ。御  
 式ハ公方様ト同シ。總メ讀者ノ頭取ハコレニ當ル者ハ。潔齋メコ

ヲ勤ムト又曰其御文中異國ノ通路ハ嫌ハセラレシト聞フニ  
杯語ル吾ガ輩コレヲ聞奉ルモ偏ニ忝感増ク御長久ノホド喜  
祈千萬ナリ殆書經モ是ニ取ベシ

又其人ニ吹上御庭ノイ問タレバ曰フ御苑中ニ丹頂鶴雌雄并ル  
籠ニ享保二年松平周防守献上ト記ス算スルニ此年ハ有徳廣  
御治世ノ明年ニメ當天保十一年ヲ距ルイ百二十四年然ハ斯禽  
千年ノ齡ヲ保ト謂フイ宜ナリ又此鶴年々子ヲ産メ其子六七  
雙アリト又問雛皆丹頂カ否初ハ常ノ如ク八九十年ノ頃ヨリ頂  
丹シ又卵ヲ破ルイ三十六日ニメ生ル又問其籠ハ何ニ廣所ニ高サ  
一丈許ノ上所々ニ張金ヲ引渡シタルバカリ籠竹等ハナシ雛鶴

ハツレモ無ク廣所ノ繞ニ籠垣ヲ爲シバカリ也ト

○十月十三日ノ泚汰書ニ 所ノ在間ニ於ク井伊掃部政  
所懸ハ以上意所懸置沙馬トト見ユ

又十八日ニハ今ク時々所供振ラ駒場野ニ為沙鷹野ト為  
成宮天氣相付今朝沙延引トト作出ト

右ノ彦根侯へ御馬ヲ賜ハリシイ不審メ有シガ是ハ當年駒  
場野ノ体ヲ見物願ハレタル所 大御所様思召ヲ以テ御野羽  
織ト御鞭ヲ賜ハル因テ 公方様ヨリハ鞍置御馬賜ハリタルト  
内仕人某語レリ又當年ハ御老中ニモ太田備州脇坂中書ト  
是モ見物願ハレタルト聞ク常例ニハ有ラザルイ乎

南畝子嘗テ御徒士ニテ有シ牛寛政盛代ノ頃口占シハ

秋 蚊 物

世の中女のほどうるまゝいゝものハキヤ

鳴声

めんぶとりつゝ袖つうれもせは

文武

蓋シ守國院ヨリ々執政ノ所治ヲ指セリ右ハ前ニ記セシト覺  
エレバ茲ニ其委ニ及バス然ルニ項宗耕ガ其逸ヲ詔ルヲ聞

靜謐 標 上

まも添とゞもも免る紙金羽

兩

油ひのちあゝぬ天がトウ那

コノ歌ハ原南畝ガ口占ニハ非ザリシヲ何人カ詠セシニ其時  
人々吹聴メ竟ニ南畝ガ歌ニ成リシト紂之不善不如是之  
甚也天下之惡皆歸焉トハ此謂也

天保十二  
庚子

○世ニ西野中ト呼フ紙近來ハ價騰テ高ラナス又坊肆ニテ挑  
燈ヲ張紙ヲ五把ト呼ビテコレモ近頃價殊ニ升ル定メシ是紙

等ハ常陽アタリノ地ヨリ産買セル者カ然ルヲ此春水戸侯下國  
有リテヨリ次第ニ其價下リテ今ニテハ買估ノ者多ク其惠ヲ  
蒙ルト是思フニ水侯政治ノ及ブ所歟若然ラバ如其仁如其仁

○嚮ニ能勢源藏ガ轆轤頭ノ女ヲ正ク視シイヲ云タリト覺

庚子

又頃聞ク宗耕ノ識ル人ニテ竹屋半四郎ト云ル高去年  
マデハ在タルガ今ハ七シ年齢モ四十餘ナリシ其人四五年ノ際ニ  
妻ノ故ナクメ家ヲ出ルイセ人トカ彼ノ半四郎ガ爲メ實義  
ナル者ニメナカク浮薄ナル所致ハナシ然ルニ妻ノ斯ク有ルヲ察  
スルニ半四郎夜寐ルト其首展出テ帝ノ上ニ轉一二尺ノサキニ  
在リ想フニ妻コレヲ觀テ懼氣見ワルク思ヒ出ルナラント宗  
耕モ洗湯ナドニテ往值フニナルホド其首筋ノ回リニ横皺アルイ多ク  
是ラ常人ト異ナリ定メシ身心休スレバコノ横皺展テ首遠ク出  
ルナラシ右ハ男ノ轆轤頭ナリ

○兩裡聽者一人モ無ク宗耕ト軍講指向ノ話中朝鮮攻ノイ及

ヒ耕曰其御家ニハサツ彼邦ノ御獲物有ルベシト予曰ナルホド彼是  
ノ所ニ其時ノ物モ有レ先ハ一品モ無シト云ベシ然シ法印ノ其役ニ  
用ヒシ覺ヲ傳ルガ甚シキ喪物ヲナカノ大將ノ著スベキ者ナ  
ラト云ハバ耕曰御尤ニ承リ候黒田家ニテ彼役ニ長政著セラ  
レシト云御具足ヲ視タルガ胴著ニメ俗間ニ爲ヤ爲事者ナドカ骸  
身ニ著テ井ル腹懸ト謂フモノ如ク前後ニ革ヲ合セタル者ノ首ノ  
所ニ襷ノ如クメ何カ黒ク塵抹ナル塗ニ破レタル所有ルニハ何カ革  
ニテフセラメ綴ツケテ有リ然ルヲ父公ノ具足トテ御子右衛門佐  
時其裡ヲ金梨子地ニ塗給ヒ表ハ往時ノモノ存セラレシト語ヒ予  
思フ裡ヲ新シク爲セシハ惜シキ也夫ヲ聞テハ法印公ノ御覺ハ昔

時ノミナレバ當事ノ有サテ想知ラル

○今縁山ノ病坊雲晴院ノ住持ハ因幡ノ人ナリ又過シ世ニ聞コ  
ヘシ普門律師ト云モ同國ノ産ニテ雲晴ヨク來歴ヲ知りタレバ  
其語レルマシ茲ニ記ルス律師彼國鳥取ノ城下ニ生ル俗親ハ  
長谷壽庵ト稱セシ豎者ニメ其三男ナリ幼年ノ井城下ノ日蓮  
宗妙要寺ノ弟子トナルコノ寺ハ因幡ノ家老鶺殿大隅ガ開基  
テ今モ檀家百五十軒ホド有リ普門年三十二ノ頃マデ此寺ニ住  
持タリ是ヨリ改宗メ天台伯耆ノ大仙寺ニ移住ス居ルイ七年京ノ  
比叡山ニ到テ留リ其後高野山ニ於テ居ルイ七年真言ノ密部ヲ  
学修シ再叡山ニ還リ星霜十三歴其間撰ニ值テ京師莊嚴

院宮ノ御師範タリ而五年ノ後 仙洞様御在位ノ片ナリシガ  
太子無キヲ憂給ヒ叡山ニ 内勅セラレ佛法カニ依テ 皇子ニシ  
坐スノ修行有ルベキ旨ニ就テ一山評議メ護所童子ト云大法其  
餘モ當時ニ於ハ普門精密ナレバ逆コレヲ 勅答ニシケレバ迺普門  
ヲ 御所ニ召サレ関白殿ヨリ直問アルハ内妃妊身有バ 皇子  
皇女何レカト尋ラル御答ニ一七日修法ノ上ナラテハ御答成リ難シ  
ト申ス是ヨリ七日ノ修行畢リ参内メ極メテ 皇子ナラント申上テ  
又萬一 皇女ナルベクハ變定男子ノ法ヲ以テ必ズ 皇子降誕ニシ  
坐スベシト堅ク答ヘ奉リシガソレヨリメ妊妃十月ヲ滿セシニ 皇子降  
誕坐メス尋テ十五歳ニ至ラセ給フ迄月毎ニ三たび参 内メ

御長久ヲ禱リ奉レリコノ皇子即今上帝ニテ坐ス因テ御即位有テ後ハ普門関東ニ下リ専ラ佛法ノ天文曆道弘通ヲ心願シ最初上野ノ御門主ニ願出タルニ聞濟有タレド司天館ノ方曆法ニ故障アリ迎表立弘通成難ク但ク釋家ハ構ナリ其曆書ノ如キ俗間ハ賣買ヲ禁セラル然ルニ其項縁山ニハ教譽僧正在職ニテ彼ノ才ヲ擧ラレ大方丈ニ於テ佛法曆書ヲ講釋ス因テ山内三嶋谷ナル空寮ニ住居シ寶譽僧正ノ代ニ惠照院ニ住職ス天保五年九月七日其院ニ寂ス惠照院ハ律院ナリ又予ガ律師ト初テ相見シハ天祥ノ南道ガ介ニ依テ駒込ノ濟松寺ニ往テ天文ノ講聽ニ交リ又是ヨリ識人トナリ芝ニ遷リテモ屢ク惠照ヲ訪ツ其説ヲ聽聞シ

歡喜迺還ル或年律師上京ノ擧有リ人以テ東歸無カラント予迺莫田信州ガ師ト懇ナルニ因テコレト謀リ往テ律師ニ説ク且癸塗ノ日八品川ニ送レリ雲晴ノ當住持ハコノ井ノ初識トス律師因テ再ビ関東ニ還ルコレ等後輩ノ爲ニ貽記セリ律師ノ没ル殊ニ痛惜ス因テ其葬墓ノ所ニ就テ親ク香華ヲ供セリ墓地ハ吾ガ雲晴夫人ノ御墓所同域ノ邊リナリ

○日成録ノ拾遺天保庚子ノ冬トス

十月廿九日

羽衣  
時服十五

紀伊教家老

水野土佐守

西九中流の向大奥の御普請所用の御札



右於芙蓉... 間老中列在... 大炊... 中...

紀伊... 家老

山中筑後守

銀百枚  
時辰十五  
羽織

減代格... 是...

用人... 小谷作内

銀六十枚  
時辰七  
羽織

減代格... 是... 土生廣左衛門

島... 脚間左衛門

銀五十枚  
時辰七  
羽織

島... 衣身三郎左衛門

松島一... 左衛門

羽端... 左衛門

守... 左衛門

田中... 左衛門

岡... 左衛門

寺田... 左衛門

上山... 左衛門

宮崎... 左衛門

田中... 左衛門

小田... 左衛門

前田... 左衛門

銀五十枚  
時辰六  
羽織

調方... 是...

調方... 是...

島... 是...

銀五十枚  
時辰五  
羽織

中村三郎右衛門

松本吉助

志賀乙次郎

森沼用右衛門

寂上助右衛門

銀三十枚  
羽織  
時服四

島衣

同制 舟下

右於躑躅間敬告中

山平右衛門

若林佐治

借服三毛

佐治右衛門

藤山十之助

西丸寺後舟上合江所用遠近

右於芙蓉間老中列在火炊

用二毛

流田一郎次

高山又藏

同制 舟下

右於沙右筆初全縁類敬告中

十一月二日

松平肥前守家次

鍋島安房

惣奉行

鍋島掃磨

銀五拾枚  
羽織  
時服五

副奉行

銀五拾枚  
羽織  
時服四

用人

銀五拾枚  
羽織  
時服二

中野神吉

同

成松万藏

同並 中村彦之丞

同 坂吉左 相室平左丞

同 月助殿 古賀六一郎

同 町屋右衛門 本下順左丞

同 月 松永五左衛門

坂吉左殿

同 元ノ兼 市川半次郎

同 伊東十郎太史

同 元ノ 成田勘左丞

松平受懐書家本

羽立拾枝 羽織 郡 正幸人

羽立拾枝 羽織 副在 梯橋又之進

羽立拾枝 羽織 用人 水野市太郎

同 同勝右方 小川雪幸

同 日 大跡忠左丞

同 日 守田矢平左

同 同勝右方 大塚権左丞

同 坂吉左 大跡小辨次

同 月 吉田吉左丞

羽立拾枝 羽織 同勝右方 廣田十右丞

同

同

程常源三郎

同

同

月成伴一

同

同

大園高之丞

松平出雲守家系

越前守家老

迫良甲斐

浪三拾枚  
時服三  
羽織

副守中老

友掛茂理平

同

同

永 宗左衛門

浪印拾枚  
時服二  
羽織

五右衛門

山田内務助

同

元編段

武井大八郎

同

同

山田祐左衛門

同

五右衛門

村井祐平左

浪拾枚  
時服二  
羽織

割元段

濱多左平左

同

同

宮田助作

土屋采女正家系

浪三拾枚  
時服三  
羽織

為存外

磯矢伊織

浪印拾枚  
時服三

副守外

西川頼母

浪印拾枚  
時服二  
羽織

用人

大村市之丞

旗奉行席

同

元段

田中鬼毛

同

用人五右衛門

本宮安之丞

銀拾枚  
時服二羽織

若原席  
及宮原席

風祭島吉島

同

若原席  
目付及

細野孫吉島

銀三拾枚  
時服三羽織

若原席

迎妻堂吉島

銀印拾枚  
時服三羽織

副吉島

柘植孫吉島

銀拾枚  
時服二羽織

場吉島

柘植孫七郎

同

元ノ

堀池重吉島

同

同

三井辰吉島

銀三拾枚  
時服三羽織

小笠原辰吉島

西原東吉島

銀印拾枚  
時服三羽織

副吉島

迎妻甚吉島

同

用人勝子方吉島

林右将

同

若原席

佐倉俊輔

銀拾枚  
時服二羽織

若原席

飯島運平

同

目付元ノ吉島

木村寛吉島

同

若原席

林一学

杉平丹波守家系

為在形

近後兵左衛門

羽三拾枝  
付腹三  
羽織

副在形

稻村平左衛門

同

用人元次郎

近後中膳

同

用人神吉左衛門

野山九左衛門

羽拾枝  
付腹二  
羽織

為在形

濱色外左衛門

同

同

神方春膳

春臺信俊守家系

羽三拾枝  
付腹三  
羽織

為在形家系

横田地六右衛門

羽拾枝  
付腹三  
羽織

副在形中系

西村五左衛門

同

先立形用人

谷田嘉左衛門

羽拾枝  
付腹二  
羽織

場中形用人

川口弥左衛門

同

用人

増倉共三太

同

為在形

小島隼之

吉山大和守家系

羽三拾枝  
付腹三  
羽織

為在形

鈴木吉左衛門

羽拾枝  
付腹三  
羽織

副在形

伴 悠之助

同

同

連水左次衛門

羽拾枝  
付腹二  
羽織

用人為守左衛門

野村次郎助

同

為在形元次郎

大場作次郎

元月廿五日 川村十郎在馬

毛利山藏在馬

銀三拾枚 羽織 杉山三郎在馬

銀印拾枚 羽織 副在馬 森 孫次郎

同 同 普信在馬 堀田月馬介

同 同 為守在馬 岡部権在馬

同 同 同 河合助在馬

同 同 同 栗 友在

西丸沙表向沙普後沙用古節公府在馬

酒井修理大夫家系

家系 深柄典膳

中系 根岸吉右衛門

同 守田加左衛門

同 岩間五郎八

用人席

同 阿部平六

同 金丸元次郎 村松又右衛門

同 伴金左衛門

同 細工在馬 友 助在馬

日

赤見

赤見

日

日

河合

邦松  
時辰二

日辰

赤見

西九沙普位... 上納金...

右... 間...

○三養雜記ト云書ヲ見タルニ觀世音菩薩ノ眷屬ニ風伯雷

公アリト云風伯ハ世ニ謂フ風ノ神雷公ハ世ノ神鳴ナリ因テ淺草寺ノ

外門ニコノ兩鬼ノ形ヲ立ルヲ知ル予ガ文ニ旨ナル知ルベシ

○或人云フ遠江國ニ櫻ヶ池ト云アリ此池中ニ蛇形ノ者住テ水中

底ニ潜居ス年々其時有テ人供物ヲ載テ持行キ池ノ中央ニ投ズルニ

直ニ沈没メ見ヘズ物有テ迎ヘ引カ如シ或ハ謂フコレ親鸞上人蛇身ト

成シノ故ナリト予因テ云フ彼上人ハ正シク遷化有テ斯如キヲ無カル

ベシト所謂門徒僧ノ識ル者ニ問タレバ

答抑親鸞上人俗性ヲ尋ルニ父君ハ

以下方圓ヲ成シタルハ宗僧尊崇  
所為ナリサレニ刪去片ハ其連續ニ妨ア

リ因テ為之テ別ツ  
読者察シ明ニセヨ

天照太神扶翼ノ臣ト仰カレシ春日大明神ト崇申ス

天津兒屋根命ヨリ三十七代ニ當ル皇太后宮大進有範ト申ス母君

八清和帝七世ノ孫源義家朝臣ノ嫡男對馬守義親四子為義

カ孫義堅ノ息女吉光女ナリ誕生ハ高倉院ノ御宇承安三年四

月朔日ナリ四歳ニメ父ヲ喪ヒ尋テ僧道ニ入り九歳ニメ母家ヲ出

音連院ノ慈鎮和尚カ法子トナル



又遠江ナル櫻カ池ノ大蛇トハ親鸞上人ノ師法然上人最初ノ師ナリ  
シ功德院阿闍梨皇圓ナリ斯人大菩提心ノユエニ彌勒ノ出世ヲ  
待ンカ多長生ヲ保タン迎スル蛇身ト成リ今ニ至テ此池ニ住メリ  
高僧傳云皇圓十勝道兼公四世之裔三河權守重兼之長男  
也抛菩提上睿峯師杉生皇覺阿闍梨剃染綜頭密優  
涉名響音三塔住功德院為衆開講吉水源空法然上人在山時受  
業其門圓嘗思付雖入佛門生氣蔽塞未出生死況在二佛  
中間無由依怙如是因循輪回三界隔生即忘失菩提種子我  
聞諸趣之中蛇趣長命也不如捨此身入蛇道待慈尊出世受  
其接化也於是使弟子普相入定之伎即至遠州笠原莊乞郡

守得櫻池禪坐數日及命終期掬池水容掌中安坐而寂羽立歲  
天久不雨一日風浪激蕩池水塵芥悉簸拂郡守勸其日時正當  
圓之寂日尔未靜夜鈴磬音隱々聞於池中於今忌日鄉民  
備盛饌祭於池上云

右ニ批レバ前話ノ親鸞ハ皇圓ノ誤ナレド圓カ蛇道ニ入シト云モ  
異ムベキナレ也サレモ今尚其池へ供物ヲ備ルナレバ何レモ物有  
テ池底ニ居ルハ違ハス怪トス當シ

○予ガ隱莊ノ庫内ニ久ク埋レタル器中ヨリ侍婢一幅ヲ得タリ  
予ニ示ス視ニ草畫ノ人物ニメ上ニ一首ヲ題ス歌詞卑俗トス或人  
曰コレ近衛信尹公ノ所畫題ニメ正ク真蹟ナリ因テ尚其匣ヲ

搜ルニ古筆氏ノ鑒札有り云フ信尹公ノ真筆又畫家狩野  
洞益ニ質スニ亦曰筆力不<sup>ナ</sup>凡某輩ノ及<sup>ラ</sup>所ニアラズト然ル  
中ハ信尹公ノ畫讚タル疑<sup>フ</sup>容レズ予又熟視スルニ世傳<sup>フ</sup>渡  
唐天神ト稱ルノ像ナリ題讚モ蓋<sup>シ</sup>菅公誓願ノ辞ナル歟  
下ニ其縮圖<sup>イタ</sup>ヲ出ス

又或人曰フ是レ近衛公何ノ故カ百幅ヲ認給ヒテ世ニ普ク  
爲<sup>セ</sup>ラルト何ニモ然ルベキハ觀世新九郎ガ家ニモ是ト全ク同  
ジキヲ藏ムト<sup>ト</sup>秘<sup>シ</sup>之<sup>レ</sup>バ或人ノ言是ニ<sup>メ</sup>他日又他ノ所傳藏<sup>シ</sup>  
視<sup>ニ</sup>テ<sup>シ</sup>ヲ冀<sup>フ</sup>耳

極あはれ

畫上讚  
字行如此

いん

志つふとる

神

し

のくま

きり

そり



疏文 右上方鬼神

クウ井クウ井

部多駄南 薩婆訶

疏文 右下方鬼神

クウ井クウ井ハ重語ニテ下方ノ鬼神ヲクウ井ト云ト聞コエタレ  
ハ彼僧徒等山中ノ鬼神ヲ始ハクウ井ト名ツテ来リシヲ大元  
帥別行儀軌ニ獸形ノ人立セシヲ佛説ニ天狗ト説カレタレバ天  
狗ト記シタルニテクウ井ヨリハ語モ雅ニ聞コユル故ニ遂ニ天狗ト  
稱名定リタルト聞コユ儀軌ハ例ノ暗記ナレバ本書点檢ヲ命ゼ  
ラルガシ

行智曰昔安覺ト云シ僧有リ唐土ニ渡リテ彼地ニテ一切經ヲ  
諳記メ歸ラント思ヒテリサル程ニ經ヲ悉ク空ニ覺ヘ歸リテ後  
ニ其經ヲ書シ迎机ニ筆硯ヲ取具シタルヲ首ニ掛テ道ヲ歩ナガ  
ラ經ヲ書シタルト云其經今尚西國邊ニハ残テ安覺が經ノ切レ  
逆持傳ル人モ有ト聞ク此事昔詔リニ聞クノミニテ親ク其人ヲ  
視ズサレバ安覺ガイモ今ハ信ズル輩モ有ラジ然ルニ梅居士ガ  
強記博洽ハ亦安覺ガ下ナルベクモ覺エズ今ニ始ガルナカラ  
指當リテ言フ其ハ何書ニ出テ斯所ニ見ユ杯云フ常々ニメ  
囊中ノ物ヲ探ヨリモ速ナリ所謂神才ナラン

金剛頂畧出念誦經ナル蛩蛩ノ文居士例ノ諳記ナカラ假ソ



右グケイト云フガ鬼名ニハ非レグケイト云フト續ケルガヤダテ即下  
方鬼神ノ稱ナル故ニ。魍魎ノ族ノ名ニ呼テ「グウイ」ト云ヘルガ。轉  
ジテ「グヒシ」ニナレルナルベシト。居士ノ考ヘ云ヘル也。

又云、ブツ今云フ家猪ト同語ナリ。梵語ブツ「グウイ」ト云フ猪頭鬼  
神ト譯スコレナリ。家猪ヲ「ブツ」ト云ハ、モト梵語ナラシ。其近邦  
「シヤロ」シヤロ邊ヨリ來ル黒坊ナドノ方言ニ云ヒナレタルガ。直ニ云  
傳ヘテ。此方ニモ呼ルナルベシ。グケイト云フモ、コノ猪頭鬼神ト聞ユル  
ヲ。此方ノ天狗ハタ其ニ似タリヤ否ヤ。

一行智亦按ズルニ。天狗ノ説古來區々タリ。晋書天文志。杜甫  
詩集博聞録。偽造ノ延命地藏經等ヲ引テ。或ハ天狗異流

星ナリト云ヒ。或ハ鬼畜ノ類トシ。又ハ山陰ノ獸ナリト云フ。諸説紛  
紛更ニ適從シ難シ。因今案ズルニ。天狗ノ名。決メ本文ニ依テ考  
フ可カラズ。只是此方ノ俗稱ニ。引書ノ沙汰ニ及フ可カラズ。扱  
其俗ニ天狗ト云フ者。思フニ二種アルベシ。

其一ハ。往昔持明修驗ノ高僧。生前ニ効驗悉地ヲ證スルノニ  
非。没後ト云ヘ。神識尚世ニ住メ。山巒絶嶮ノ地ニ留マリ。人跡  
必ナル所ニテハ。千歳ノ後ト云ヘ。時々其神靈ヲ現ズルイ有リ。  
俗人々々。深山幽谷ニ歩歷スル牛。親ク其神相ヲ見ルニ。何レモ  
山伏僧形。或ハ仙翁ノ形トナリ。白首高鼻。頭中鈴掛。或ハ僧道  
人ノ形ヲ爲スコレ皆。曩昔持明修練ノ時ノ形兒ヲ。其ニ存在

正和 卷之三

斗月記 卷之三  
セル者ニ俗ニ所謂「グヒ」ナリ。役行者ヲ始トシ、代々ノ山峯修練ノ驗者又弘法大師、真濟僧正、慈慧大師、慧亮、慈忍、法性、房尊、意、淨藏、貴所、慈鎮、和尚、下リテ、常陸房、海尊、武藏坊、辨慶等ニ至リ。或ハ飯綱、道了、金毘羅、秋葉、權現ノ類、生前ノ氣質剛直ニテ、持明薰修カアル人、明呪ノ功力ニ依ルガ故ニ終ニ神靈死セズ、千載奇特、異靈ヲ現ズル者ナリ。コレ曾天魔波旬ノ類ニアラス。南印七百歳ノ婆羅門、龍智、菩薩ナド云モ、亦皆此類ニテ、持明藏ノ功力、奇特ノ至ス所ナルヲ知ベキ也。然レバ此境界ハ、凡持明修驗ノ最願フベク、生ナガラ此衆等ノ位ニ至ルイヲ得バ、實ニ悉地ノ成就ト云ベキ也。斯

ク考ル中ハ、始テ古來高僧ノ魔道ニ墮タリナンド云フ。汚名ヲ雪クベシ、世人不知、悉クコレヲ天魔羅ノ眷屬ト思ヘリ。是皆大仙阿羅漢ノ屬ニテ、決メ鬼畜、魔波旬ノ類ニ非ズ。混ズベカラス。次ニ種アリ。コレ真ノ天狗ナリ。鷹、鷲、鸞、兩翼アリ。或ハ山谷林中ニ栖、或ハ聚落ニ出テ人ニ災シ。居家ヲ燒亡サスル類、都テ世ノ動乱ヲ好ム者ナリ。コレ西洋ニ所謂「エンゲル」ト云者ニテ、正真人ニ仇スル惡魔ノ屬ナリ。是ハ實ニ恐ルベク、遠クハ正神ニ非ルガ故ナリ。然レモ此モ亦天神ノ命令ヲ奉メ、時有テ災祥ヲ呈シ、業感ノ衆生ヲ懲スガ故ニ、特ニ災ヲ下スイモ有ルニヤ。然レモ、マツハ邪魔惡鬼ノ部類ナレバ、恐ルベキ者ニ南正月元三ノ夜、記上行智

右ノ説ニ就テ憶出セシイ有リ。先年ノイニテ東叡山下根崖ト云ニ居ル婦ガ語レルハ五六年前ノイニテ彼邊喬木ノ梢ニ前記セシ如キ白首高鼻中鈴ノ人居タリ人望觀テ怪ニ誰渠ト呼集テ瞻タリシガ皆異ンテ定メシ天狗ナラント云合フウチ其形見エズ成シト實事ノ談ナリ然レバ世ニケヒモ無キニ非ズ右ハ正シキ話也。

又一ハ酒井彦世子ニテ幼年ノ井ト聞ク濱町ノ邸ニ居ラレテ風鳶ヲ揚テ嬉トセラレシ中ニ迥ニ天上人声アルユ正不審メ井ラレシガ漸漸近クナレバ能ク視ルニ空中ヲ來ル者アリ人集テ仰ギ見ルニ人ノ両足天ニ向ヒ首ハ下ニ垂ル婦女ナリト覺シク裾鞆テ其首ヲ

覆カ爲ニ男女ヲ辨ゼザリシガ遠空ナレモ兩股ノ間僅ニ隙戸ヲ見ル又声ヲ発メ泣叫ブ一限ナシサレモ物ノ提行ク形ハ見ヘガバ思フニ所謂天狗ノ切手タル者カト斯クスル中コノ異移リ行後河下ノ方ニ去テ空中ニ見エズ成レリト是等ハ鷲眼兩翼ナルエンゲルガ所爲ナルイ必セリ亦正シキ話也。

○日成録ノ餘波

十一月十五日

時服也 西丸抄 松平内通改

西丸抄 西丸抄 舟上金は沙風遠 亦未成行とあり 右に芙蓉 河掃部政老年列記 誠希中河





以烟工所

增田弥三郎

同十六枚元

森川八三郎

以每支

猪狩富太郎

同十枚元

竹崎忠太郎

西丸奥表以透之款新規出賣之候所用在節外存之

右控同席同人中御侍在名家

漆在行

河合内禮助

同七枚元

佐久間忠太郎

西丸伊勢後且以透之款出賣之候所用在節外存之

以透之款出賣之候所用在節外存之

以每支

增田金太郎

同新元

廣小松吉郎

同新元表向普以奥向以地結以安結之所用之振外存

同

同

土屋善太郎

同五枚

以配每支

柳道吉郎

同新元以材木板以買上之候所用在節外存之

同十枚

以每支

須藤市左郎

以每支

後藤一三郎

同七枚元

以每支

安田信次郎

同封存出系の通有歌合器出打之方成及扱小之付

〆〆

同

同

高柳小三郎

同五枚

同四枚

高橋次郎

同七枚

同

弟隈初七多水

同封存國の林以材石於城出方成及扱小之付

右於同席同人中海の侍衆同衆

五士兄の家初者

同五枚

出野全右衛門

二九の角西九の通有の沙用細工の酒の在成の付

臨陣見了る三合器初出初小付

右於躑躅の同人中海の林肥後守侍衆

十二月廿四日

進物者

中村大五郎

設樂志十郎

中野根合三郎

田中唯一

蜷川伊多郎

勝桓多郎

芳我松

梶 四郎玄水

若林 市右衛門

神保 八郎

大久保 將監

谷 三計

内藤 右近

塩入 大三郎

三浦 玄四郎

松平 権多助

坂本 源六郎

坂本 源六郎

勢 谷十郎

榊 變兵衛

山本 友次郎

大塚 三郎左衛門

神保 十市郎

羽吉 傳十郎

秀坂 三幸

依田 頼助

蜂谷 勝太郎

皇浮健

安初武部

安初又四郎

三木勘十由

長崎正十郎

山岡五郎作

幸山親貞

荒井十多郎

岡部内通

次田幸多郎

加茂庵三郎

西丸沙夢語付法向ト名物持ト長智ト小ト付  
卷五郎免トトト

右於鄧陽ト間ト鏡ト前ト中ト侍ト在ト

○前卷五十九今ノ林祭酒カ日光御藏ナル 神祖ノ御山駕拜見セ  
シ條コノ御駕ノ屋根ヨリ鏡カヲ見降シニ打貫アルト云シカ何者  
カ斯ル非逆ノ所為ナリヤト念止トガリシニ近頃宗耕ニトコノ事何ニ  
ヤト問ハバ曰

武徳大成

慶長十九寅年十月廿一日彦根松原ニ 神祖御

駕竈江鉄炮打入ト作者有之御同付山本新五右衛門吟味之ト真田

家来日中部立部（鳥羽）と申者此辰言上（波作）扱之（バ）大坂御陣ノ并ト見エタリ。真田ノ奸計ハコレニ始ヌ（ナ）ナガラ彦根ノ松原ハ御味方隨（ノ）地ナルヲ爰ニ姦伏（ガニリ）ヲ斯出（カク）セシハ流石真田ナリサレモ御當家ノ御剛運ハ神明諸佛モ加護アレバ何ナル真田モ迎モ及（イカ）不所ニアラス。其上可（ヲカシ）咲キハカリ打損ジタレバ人々駭（オドロ）馬キ昂（ト）搜索タルニ水ノ上ニ居タル（テ）ナレバ逃遁（テ）ル（ル）モ協（カ）ハズメ忽生捕ニ為ラレシト云。筆記スルモ笑フベク又然ル可キ（イ）也喜々（ニ）榮々。

又コレハ別トナガラ前ノ御山（カ）駕ノ御紋散（チ）ニ葵ト（カ）酸（カ）醬（カ）ヲ交ヘ出セシ（シ）ヲ不審ニ思タレバ又宗耕ニ問フニ曰フコレハ御紋ヲ今俗ノ謂フ（カ）蔭（カ）日向（ヒ）ニツケタルニテ酸醬ト見ヘシハ蔭ノ葵ナリト何（イ）モ宜

子庚

ナル（ニ）テ然（リ）トス（ガ）シ今酒井氏ノ家紋ト思フ考ヘサル（ア）過（マ）ナリ。

○此項武州川越越後長岡羽州庄内ノ三所國替ノ命アリ極月三日天祥寺へ詣テ語話ノ中雞林和尚云フ川越ハ中頃松平信綱（伊豆守）居城ナリシガ其頃肥後天草一揆ノ并上使トメ往カレ彼賊（テ）ノ出（ル）ヲ攻カ子タルヲ患テ歸陣ノ後其居城ニモ新ニ出丸ヲ築キタリト雞林モ先年彼地へ往タル中親ク其處ヲ見タルカ大手ノ前ニ土手ヲ設ケ何カ迷路多ク有リシト借信綱コノ出丸ヲ築タル（ト）官旨ニ觸レ封（シ）ヲ遷サレテ某ノ地ニ赴ト。

右何カ扱（ハ）ル（ト）有ラシガモト浮圖氏ノ話ニメ且年代モ定カナラス因テ茲ニ其言ヲ採テ其實ニ於テハ後人ノ撰（シ）ヲ疑テリ。

○世六思に掛カル一有り日野丞相ハ近頃縁家ト成テ参向ハ  
何時モ官請メ對晤ス然ルニ予ガ莊災後ハ其一モ協ハテ過々  
ルガ今茲 立坊ノ一ニ就下向 発歸ノ旅中ヨリ書ヲ贈ル曰

松浦老彦 書葉中

資愛

上略 然者肉ノ中入試作

御所方ニ從 御覽被為立道成寺ナド地流役者ノ者  
毎々 御所ノ觀世流ノ者小敷打答支作先年沙家ハ古  
抱ニ過三郎程能上京也

仙洞御訓ヨリ 御所ノ御意ニ在候ハニ其後ノ人休世ニ指テハ  
江戸ヨリト石登能多ハ先格世ニ邊國ハ尾州紀州位

道程ニ他國住ハ石登能多ノ頼例ニ在候觀世新九郎ハ  
此家ハ出入格別ニ親交ハ在候ハ何卒京都邊國ノ才子内ハ  
道成寺小敷傳字ノ人休世ニ在候ハ表ニ在候ハ極ニ  
中ハ候ハ斯ク傳字ノ在候ハ極ニ在候ハ新九郎 衆上飛  
節中ハ無事ハ在候ハ極ニ在候ハ

御所方ハ御杯ガ至極打解ハ御意ニ在候ハ何卒 御意ト在候ハ  
心底ニ在候ハ風ニ世ニ在候ハ在候ハ書叶思ハ在候ハ今十ハ  
六郷川支品川遠方ニ在候ハ書思ハ老彦ノ在候ハ在候ハ  
在候ハ在候ハ是非何シニ在候ハ周旋ハ在候ハ在候ハ  
沙出入在候ハ在候ハ在候ハ在候ハ在候ハ在候ハ在候ハ





より申言ふ事不問白殿侍此御前 即取吉右衛門と申者申  
右前中へ入好方 程能お整て申す六道成り申す 仰付申す  
言所悦び申す申す 今老後く申周旋す 新九郎も速く申す 打  
申す申す 仰付申す 十一日此御前見入兵 関白殿御目  
御申す申す 申す申す 申す申す 申す申す 申す申す  
申す申す 申す申す 申す申す 申す申す 申す申す

十月廿五日

資愛 拜復

霜月廿二日新九郎来り云フ坂吉右衛門昨夕到着又因テ御急ノ  
トナレ今夕ヨリ道成寺引渡ノ由ヲ告グ此日八林内史訪ハレ對話ノ  
中ナレバ値ハズメ還ル執次ノ者問シハ幾日ヲ經テ引渡シ畢ルヤ答

十日モ歴ベキガ此度ハ御急ナレバ八日モセバ成ベシ斯セバ直ニ帰登セ  
シト其後晦日能有テ觀世ガ宅ニ往タレバ新九吉右衛門ヲ連テ棧  
舗ニ入り初テ値ヘリ相應ノ人トス明日朔帰途ニ赴ト告又又前ニ新  
九来レル申京簡トテ示ス

上包

江戸

森井共々様

觀世新九郎様

高野九郎左様

禁裏所用

高木惣七

中略

以手紙得貴意ハ略然也 禁裏所用御前書之御前書  
御好方片山美助江流為 仰付申す坂吉右衛門と申者

作甘宮方 所因之河河所流也。此山亦未詳向者云云  
作出之古。自然未十二月。云云。在平戸。多報。平戸。在平戸。云云。  
為用意。因入出。府波。山。極。中。在。山。百。格。制。云云。所。好。云云。  
作。甘。宮。方。所。因。之。河。河。所。流。也。此。山。亦。未。詳。向。者。云。云。  
作出。之。古。自然。未。十二。月。云。云。在。平。戸。多。報。平。戸。在。平。戸。云。云。  
為。用。意。因。入。出。府。波。山。極。中。在。山。百。格。制。云。云。所。好。云。云。  
作。甘。宮。方。所。因。之。河。河。所。流。也。此。山。亦。未。詳。向。者。云。云。  
作出。之。古。自然。未。十二。月。云。云。在。平。戸。多。報。平。戸。在。平。戸。云。云。  
為。用。意。因。入。出。府。波。山。極。中。在。山。百。格。制。云。云。所。好。云。云。

高木 惣七

高木 惣七

高野 九郎 佐助

惟嗣 云

友井 共 云

永世 也

十月 朔日

觀世新九郎 様

下十人。藤井三人。八何者。ナルヤト聞ク。當方。觸流ノ如キ人ニ。  
禁廷御用。御能ノ井ハ。是等ガ進退ニ就テ。仕手。噓子。凡其旨ニ與  
ルト云。

○又庵僧語ル。今酒井修理大夫若狹小濱ノ城。以前ハ別處ニ。  
山城ナリシガ。猷。廣ノ御時。何カ旨有テ。今ノ地ニ移サル。今ハ平城ナリ  
ト。借右ノ山城中腹ニ古墳在リ。今ハ神ニ祀ル。泣珠明神ト號ス。祠  
モ大ナリト覺シク。其額ハ。後水尾帝ノ宸翰ナリト云。  
又傳フ。斯神ハ昔神功皇后ノ御時。三韓退治ノ御軍ニ從奉リ  
シ臣ナリシガ。何カ策謀ヲ泄セシ罪ニ依テ。韓土ヨリ直ニ今ノ地ニ謫

小濱ノ山城。昔ハ名  
ヲ白雲城ト云シト。  
今ノ城地ハ何トカ  
云ラニ。又古城ヲ白  
雲ト云フナク。其山  
ハ高カルベシ山腹  
ノ古墳ト云モ思ヒ  
合スベキニ。其地  
ヲ見テ欲シ。

セラレシノ墓所ナリト

コノ神后韓征ノ從臣ト云フハ此神ニモ限ラス予ガ城下ノ崇社七郎權現ト号スルモ小社ナラ又宮居ナルガ同ク韓軍

從行歸臣ノ葬地ナリト定メシ諸處ニ此類ノ遺跡アルイナラン

又神ヲ泣珠ト號スルイハ土俗傳フ往古干

珠滿珠ト稱セシハ軍略ノ詔ナリシヲ是ヲ言漏セシテ故也其事碑

文ニ見ユト

コノ碑祠前ニ在リヤ僧ガ語レルマシ記セリ

又泣珠神始俗体ナリシノ子孫十家今ニ連綿トメ能入村ト云ニ居住

セリサレモ言傳ノミナリ系譜等ハ有ラズト

又右ノ能入村ニモ亦泣珠ノ祠在テ每歲六月十五日祭禮有リ

又神功皇后ヲ祭ル神官彼神前ニ就キ泣珠神ノ御赦免ヲ申

湯起ヲ行フ然ルニ湯沸騰テ迸飛斯ル片ハ神后ノ御怒ト云テ

神官御赦免ナシト唱フト

斯有シテ近頃京ノ諸司代ナリシ修理大夫小濱當役ノ中幸領分

ノイナレバ此神ノ故ヲ禁廷ヘ告奉リテ御赦免ヲ乞願ヒ申シ

罪赦ノ救諭下リシヨリ今ハ神怒ノイ歇タリシト奇キトモ也

○世ニ久ク謂フオトシハサシ陷話ト云カ若干實事モ亦有リ近頃ノイニテ

予ガ東近ノ野宅ニ旗下ノ小普請衆住セシガ金森或曰晡時

ノ前火ヲ失メ其家屋燒亡ス予ガ左右驚駭キ種々ノ言論

ニ及ブ一人曰頃ツケ火ノ災處々ニ有リ甚患トス一人曰此度ノ

災ハ自火ナレバ憂ルニ足ラス予聞テ曰自火ツケ火ト比スレバ尚

惡シ

○過シ類燒ノ後ハ藏書モ多ク焚亡タレバ所々ニ借本メ讀シ中

三河記ト云ニ八月年号三郎殿神祖ノ御長子信康君神君原本家康

ト書ス今倅テノ御氣ニ違セ給テ御字人牢堂改浪今シシ給ヒテ

ニ勝ヘゴソ御出有此子細ト申ハ我終ニ被成宛ヘ宛疑ハ割ノ誤

神君ノ御意見ニモ付セ給ハス其上家老ノ衆サハ申ケル様ハ勝頼

ト一所ニナラセ野心ニテ候ト申上ケレバ神君聞召テ親ニ弓ヲ引事

ハ類スクナキ次第トテ服部半藏ニ仰付失ヒ給ヒケル三郎殿仰置

ゴリ憐レナリ親ニ弓ヲ引事ハ唯兩説兩疑ハ夙ノ誤今ノ事ナリニ家

老ノ者サニルトテ親ノ子ヲ殺ス事前世ノ因果トミエタリ我大敵ヲ

亡シ天下ノ主ト成ベキト常ハ思フ懸ツルニ何者カ親ト成イカニ者カ

子ト生死ル事ノ無念サヨ二人ノ息女ノ事ハ柳宮譜略云信康君ノ長女

二女ハ本多美濃守忠政室又定テ悪クハ有一シキトツ仰ケル大久保一族其外ノ人々

ニモ御形見ヲ出シケル我ハ疑クハ後生ノ事ハ大樹寺ヲ頼奉ル

善ニ供養有ベシトテ念佛十遍計唱死腹十文字ニカキ切テ服

部半藏カイシヤクト有ケレバ三代サウ恩ノ主君ニナニトテ太刀ヲ

アツベキト刀ヲ捨テ流涕コガレテ倒卧早疾ト仰ケレバ遠州住

人天方山城守泣々御首ヲ討落ス御年廿一歳ト申ハ疑クハ

花ノ想ヲ引替テ想疑クハ朝ノ露ト消給フ此由神君聞召御

涙ヲ流給フ後ニヨクノ聞給ヘバ唯偽ヲ申宛サハテ失ヒ給フ

トテ神君ノ御後悔御嘆ハ無限ト見ユ然ルニ或人ノ曰フヲ聞ク

ニ東都ノ中渋谷ノ東北寺ト云ノ後山ニ岡崎三郎殿ノ古墓トテ

在リ。相傳フ。東北寺ノ地ハ。モト大久保侯今ノ小田ノ別墅ナリノ別墅ナリシ

リ。後寺ニ寄附セラレシト。又彼墓ノ在ルハ。三郎殿生害ノ井内實

ハ。潜ニ大久保氏ノ先ト謀リ。害死ニ執成シ。大久保密ニ道シ申シ

後迄モカクニ置終ニ天然ヲ以テ卒ラレシヲ。迺其莊中ニ埋葬

シ申セシノ跡ト云。猶他書ト徴スベシ。異聞耳。

又云ク。如右ナレバ。三河記ニ載タル御生害ノ御年季ト。御墓標ノ御

遺号トハ。違ヒタルト。

又聞ク。後年ニ至テコノ御墓所ニ就キ。御茶湯料ノイヲ東北寺

ヨリ願出タルガ。假令實所ナリモ。今迄テ知レザル者ヲ。斯ク頭ハサシ

却テ由ナシ迎。官告容ラスト云。

江戸。沁子補ニ云。禪河山東北寺。妙心派下。淡谷ニ在リ。此地ナリ。

○予或日奇談ヲ聞。若クハ偽言カ。云フ。嘗テ肥州雲仙嶽サケ辟手テ。

嶋原ノ城ヨリ。城下ノ市ミチ其土中ニ成シイ有リシ。予此時ハ在城メ居シガ城後ノ方ヨリ地震メ再々ナリ

シガ城堀モ是カ為ニ必シク損ジタリ。蓋此時也。其前ノイニ。彼城下ニ一医井テ。貧窶ニメ且妻

ナシ。或夜病人来曰。某足ニ疵ヲ受タリ。藥ヲ施シ給ヘ。医諾メ藥ヲ

与フ。十日餘ニメ愈タリ。予思。コノ医ハ蓋シ外科ナラン。後其病夫来リ。謝メ曰。君ニ謝

スルニ物ナシ。願クハ某ガ一女ヲ以テ報ヒシ。医曰。我幸ニ婦ナシ。汝ノ意ヲ

容ニ。其夫還リ。其夜半ニ及テ女ヲ携来ル。医視ルニ姿色アリ。迺納メ

妻トス。医中ニ其病夫ノサシ疑フ。因テ潜ニ其蹤ヲ窺行ニ。行クイ四五

町ニ。海辺ナル松茂リタル中ニ入テ。跡ヲ失フ。彼女居ルイ一年ニメ子ヲ産ム。

男ナリ。コレヲ育フニ及ンテ。婦夫ニ言テ曰ク。出テ還ルル。我が卧  
 處ヲ見ル。勿レ。夫毎ニコレニ從フ。或ハ疑テ潜ニ卧處ヲ窺フニ。  
 巨蛇横ツテ其子ヲ乳ス。夫駭ト雖モ。知ラサル。似メ常ノ如クス。  
 婦是ヨリ頻リニ離家ヲ乞テ止マズ。或日又曰。産子ハ偏ニ遺詫  
 ス。我去テ泣ク。有ラバ。此物ヲ以テ養給ヘトテ。五寸ばかりナル明  
 珠ヲ与ヘ。出去テ蹤ヲ知ラズ。医敬馬患フト雖モ。爲所ナシ。迺其  
 珠ヲ以テ児ヲ養フニ。婦ノ言ノ如シ。後嶋原侯コレヲ聞キ。其珠ヲ  
 視。遂ニ獻ゼシム。医因子ヲ育スルニ由ナク。海辺ニ到テ其去婦ヲ  
 吊フ。然ルニ嚮ニ病夫ノ跡ヲ失シ。松林ノ中ヨリ。去婦出来テ曰ク。前  
 ノ珠ヲ失スル。我能ク知レリ。今又一珠ヲ与ヘ申ス。コレヲ以テ養ヒ

給ヘ。然リト雖モ。復再ビ領主ノ好獻ニ遭ハバ。即時ニ男児ヲ抱テ遠キ  
 ニ走ルベシ。爰ニ居給ハバ。必ズ災難有ラント。忽其形ヲ失ス。医驚キ憂  
 ヘ。其子ヲ携テ去ル。里許。然ルニ其夜。雲仙サケ崩テ。嶋原城市  
 卒ニ土中ニ墜リ。領主ノ雙珠モ亦地底ノ物トナル。衆庶咸言フ。婦  
 ト隨ヒタル病夫モ。亦蛇身ノ姑ク變セシ者ニメ。報恩ノ道ヲ妨ラレシ  
 ノ返仇ナラント。是ヨリ彼兒稍ク長メ。後雲州ニ往キ居レリ。年十  
 五ニ父ヲ喪フ。因テ出家シ爲シ。普門律師ノ弟子タリ。今現ニ尾  
 州ノ律院ニ主タリト。斯僧。流石ニ蛇母ノ性ヲ得タルカ。渴地ニ水ヲ呼ビ。  
 又雫法ヲ行フ。必ズ其驗有リト云。天保庚子十二年冬。識ス。  
 記者戲言フ。童子ノ雲國ニ住シ。終ニ尾邦ノ院主ト爲ル。皆竜

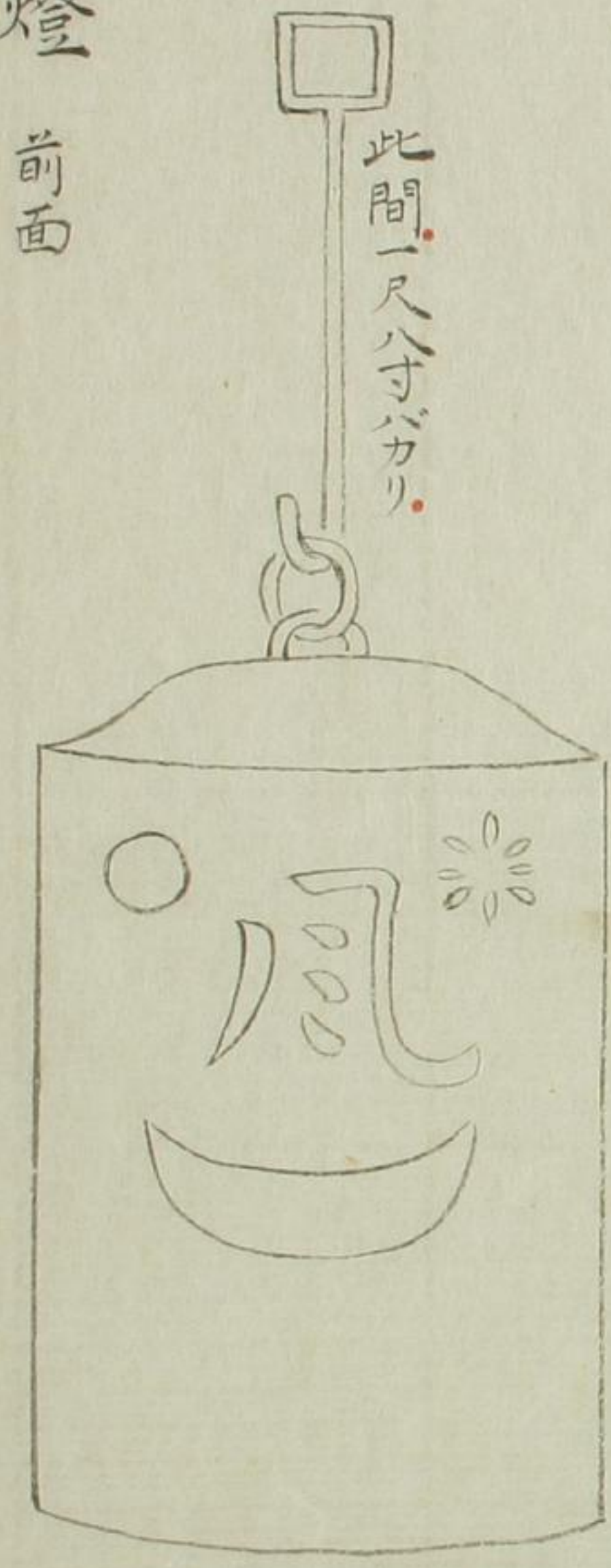
平  
凡  
因  
緣  
歎  
呵  
々  
集  
部  
室  
部  
書

○或人曰カメ井ト天神樓門下カケ懸タル風月燈ト云者ハ其本ハ昔時賴  
 政ノ井ノ物ニテ賴政朝廷ニテ怪鳥ヲ射タル井宮中ノ燈火皆滅キエタルレトテ燈  
 籠ハ消ズメ有キエト是何故何書ニ載タルヤハ分タサルカ聞クハニ記ス  
 又コノ燈ノ管カネ有ル予未ダ知ラス因テ人ヲ使メ視セメタルニ其形ヲ  
 圖メ返ル予迺親ク往視シト欲スレド懶惰コレヲ果サズ

其圖并銘

長ケ一尺ニ寸バカリ

鐵燈 前面



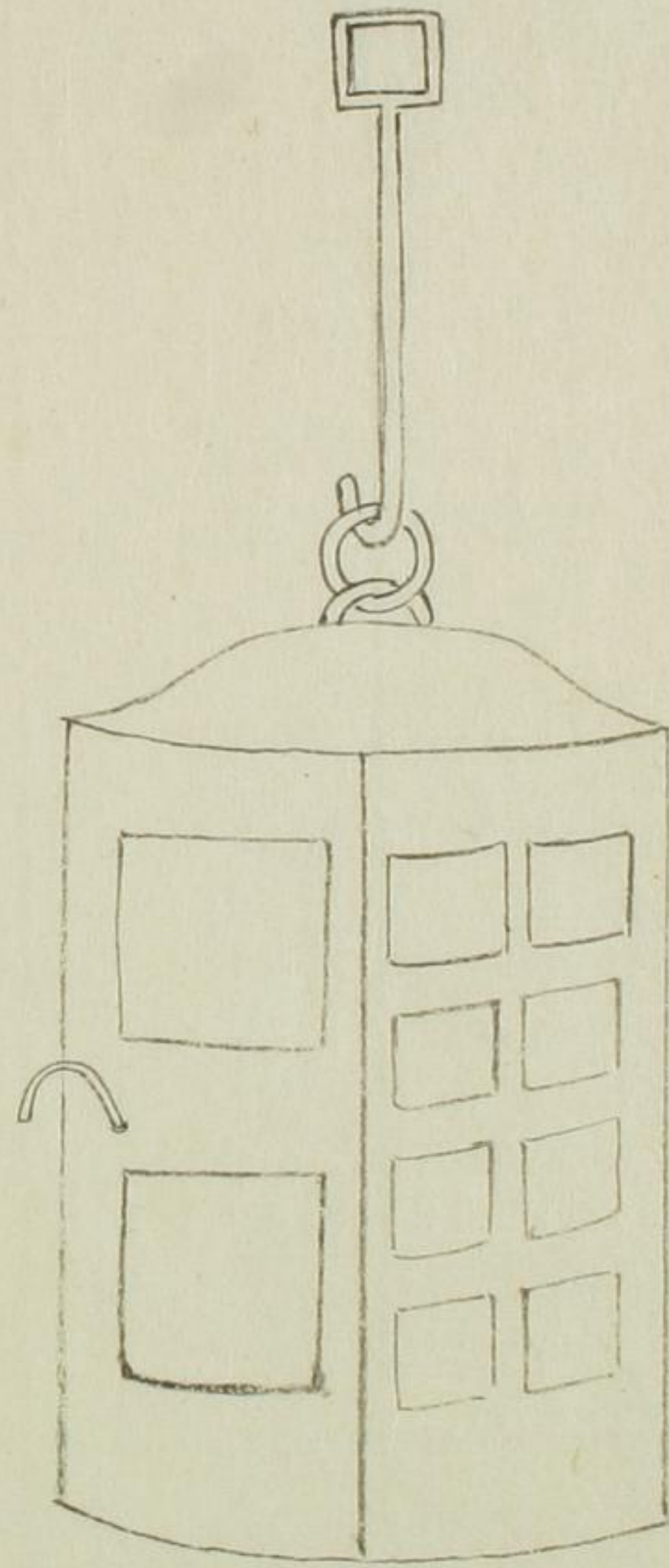
ニ寸バカリ



曰銘

龜戸菅聖廟風月鐙銘

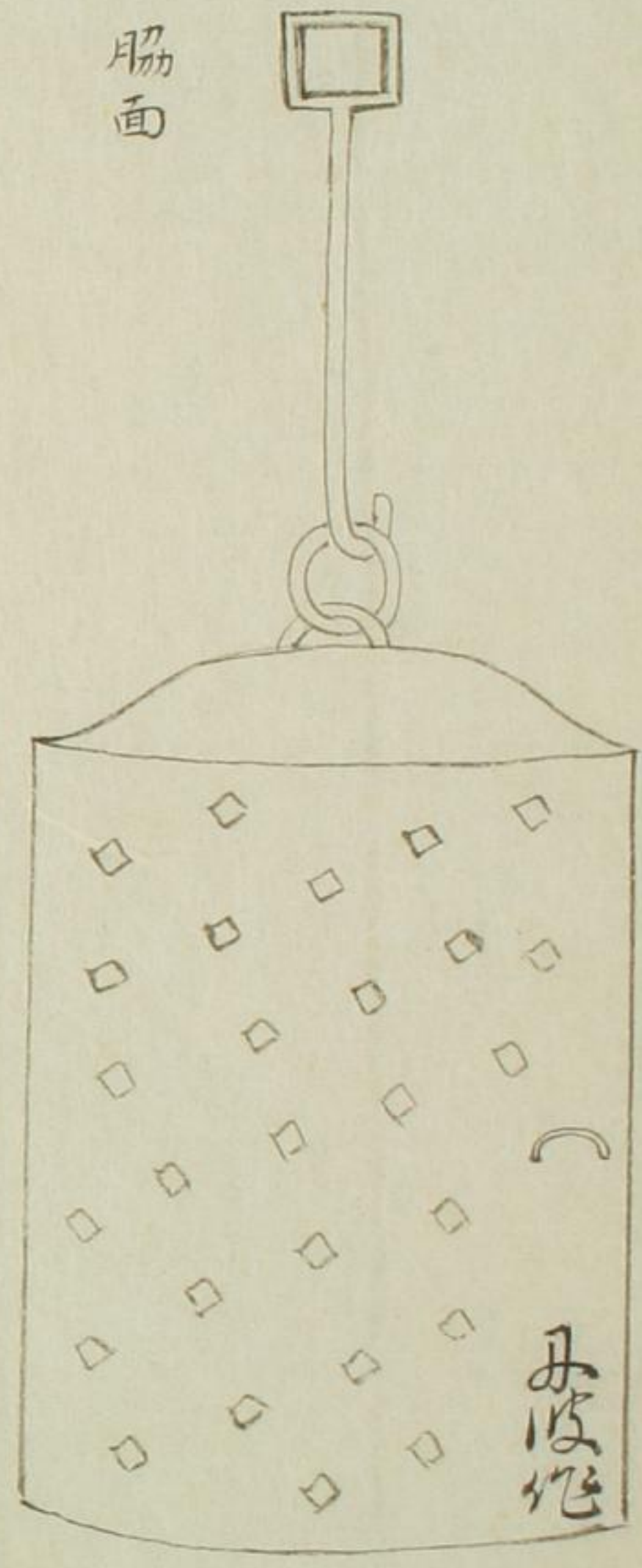
同



扉ナリ

同

脇面



み波作

コレ鑄匠ノ名

噫噫菅聖靈德可<sub>ヲカナル</sub>晞

爰製鐵燈永置廟祠

形模古式賴政遺規

名高風月煥煥其輝

與公靈德照曜無期

成瀬美道

文政甲申冬十月

右銘燈ノ前面ニ有リ

○御藏前<sub>オホトボ</sub>ノ大路ヨリ左ニ瞻ル西福寺ト云ハ福山ノ阿部氏カ寺ナリ

ヲ寺内ニ御由緒アツテ東照宮ヲ勸請ス世ニ松平山西福寺ト

呼ブ予嘗テ備中守<sub>阿部後閣老</sub>ニ問フ其御寺ヲ松平山ト號ス何

正和譜 興成堂後書

ナレ故少備州曰松平八山号ニ非ズ。神祖嘗西福ノ主僧某ニ松平ノ御稱ヲ賜ハリ松平西福寺ト稱ス。山号ニ非ズ。松平西福寺ナリト。珍シキ一也。

○或訪客ニ前載セシ西夢物語ノイフ咄タレバ未だ視ズトテ視ニイフ請フ。因テ微生高シ学ビ鄰ニ乞テ或儒生ニ借タレバ其中ニ左ノ記ヲ増ス。因テ復茲ニ移写メ前ノ夢語ヲ補フ。世ニ謂木乃伊ヲ取ル者乎。

天保戊戌秋阿蘭陀船入津之節カビタン共ヨリ書上候風説書之趣長崎奉行久世伊勢守窺ニ付。

一漂流之日本人為乗組候異國船渡来可致哉之風説書

阿蘭陀カヒタン差出候ニ付取計方之儀文化度松前表<sub>江</sub>カ  
ロシヤ船渡来候節被仰渡候御書取之趣意今般評議之  
趣ニ付テハ不分明有之哉取調可申上旨。

右御書付写外ニ書付共ニ冊五通御添越前守殿以田中  
久藏一座<sub>江</sub>御渡左衛門尉受取。

去ル五日評議致可申旨被仰聞御渡被成候久世伊勢守  
相窺候書面一覽仕候如。此度入津仕候阿蘭陀新古カヒ  
タン差出候横文字書付和解為致候如。漂流之日本人七人為乗  
組候モリソシ与申エケレス船漂流人送越候趣右者高買相願  
候為江府近海<sub>江</sub>到り候風説之由右之通日本人異國漂流罷

在候趣ニ付。手寄モ有之候ハ、重而入津之節連渡之様。当秋  
阿蘭陀人出帆之砌可申渡哉之段。御内意相窺候趣。御坐  
候。此儀林大學頭。并ニ神尾山城守水野舍人。御勘定奉行吟  
味。彼亦取調申者。書面ホモ夫々一覽之上。勘辨評議仕候如  
元來異國漂流之日本人連渡之儀者。阿蘭陀人ニモ心得罷在  
候。殊ニ今般カヒタシ申立ハ、風説迄ノ儀ヲ以。右漂流人連渡之  
様阿蘭陀人<sub>江</sub>申渡候ハ、漂民ヲ憐求儀ト。彼國ノ者共推考  
致間敷トモ難申。左候テハ、外國<sub>江</sub>相對候趣意ニ觸候筋付。漂  
流人連渡之儀ハ阿蘭陀人ニ申渡ニ不及候段。被仰渡可然。且前書  
之次第ヲ以。此後エケレス船江府近海ニ渡來之程モ難計候得共。

異國船打拂之儀ニ付テハ、文政八丁酉年之御書付ニイギリス船先  
年於長崎狼藉ニシヨビ。近年ハ所々ニ乘寄セ。薪水食料ヲ乞。去寅  
年ニ至候テハ、擷リニ致上陸。或ハ廻船之米穀。島方之船。野牛亦奪  
取候段。追々横行之振舞。其上邪宗門勸入候致方モ相聞候。旁難  
捨置事ニ候。一休イギリスニ不限。南蠻西洋之儀ハ、御制禁邪教之  
國ニ候間。已來何レ之浦方ニ於テモ。異國船ヲ見受候ハ、其所ニ有  
合候人夫以一圓打拂。逃延候ハ、追船不及差出。其分ニ差置押テ上  
陸致候ハ、擷取又ハ打留候事モ不苦。本船近寄候ハ、打潰候共。  
是亦時宜次第可取計旨被仰出候。尤唐朝鮮琉球等ハ、船形人物モ  
可相分候得共。阿蘭陀ハ見分ケ相成兼可申哉。右等之船萬一見

損シ打誤候共。御察度有之間敷故。無二念打拂シ心掛圖シ不失候  
 様取計候方。專要ニ有之。况交易願望之主意ヲ含。信義ヲ唱へ漂  
 民ヲ四ニメ。利ヲ計候様。猶更之仕方付。大學頭申趣モ有之候得共。  
 大体蛮夷之奸越ニ對シ。接待ノ礼ヲ可設筋有之間敷候。假令漂  
 民連渡候トモ。山城守等申ハ。文化度長崎表。江渡未致候。魯西  
 亞船日本漂流人連候節ハ。被仰渡候趣ヲ思辨候テモ。御仁惠  
 被施ハ平常ニ可有之処ニテ。御國之災害ヲ被為除候為。賤民  
 之存亡ニ不拘。御取計可有之。御國制之大事。一時權變之御仕置  
 付。敢テ君德ヲ薄シ候道理有之間敷候間。向後弥右御書付  
 之趣ヲ以。無二念打拂之儀。勿論ニ有之候。尤海岸御備之儀ハ。

兼々向々ニ於テ心得罷在候上ハ。今般風說之趣。別段右之向。江  
 御汰汰ニ及ヒ申間敷儀ト奉存候。

右評議仕候趣書面之通。御坐候書付立通返上仕候以上。評定所一座

戌十二月四日。御目付鳥居耀藏。二十五百石實  
林大學頭二男海防御備場見分可

致旨。於御右筆部屋被仰付候。亥正月九日出立。御代官江川大郎

左衛門。同日出立。御屋場見分始ル。浦賀奉行太田運八郎。足早ノ

丈夫九船二十艘積荷ヲ卸サセ。見分用意トシテ引揚候由。數術

家内田弥太郎。伊賀組御留  
主居支配江川ヨリ申立候テ。跡ヨリ浦賀迄相立候。

正月廿五日。奥村喜三郎。増上寺  
御靈屋領代官是測量家也。是亦江川ヨリ申

立候由。追々出立之由相聞候。

元海按。諸厄利亞。近來武威強盛。ニメ。四大洲中ノ諸國。彼ニ先吞セラレタル八十餘所。及日本ノ南方大海ノ諸邦。大抵皆吞食セリ。其本國ノ土地。八大略我日本國ト伯仲スベシ。本國ノ人民。ハ一千七百七十万六千餘ニ過カレモ。攻取タル海外ノ領地。八十六所ノ人民。總テ七千四百廿四萬餘アリテ。本國ノ人数ノ四倍ニ餘レリ。其所持ノ大船。二万五千八百六十四艘。皆悉ク軍艦製ニテ。每船大砲四十八座ヲ載セ。乗船ノ上官十七万八千六百卅人。下官四十万六千餘人。其他水主。崑崙奴。炊奴等モ。又一百万餘人アリ。實富盛ノ國也。初メ諸厄利亞ノ清朝ニ交易ヲ通ゼシ。是ヨリ前。阿蘭陀ト波爾杜瓦ルノ二國。高館ヲ為シ。共ニ專ラ貨物ヲ交易ス。然ルニ諸厄利亞ノ通ズルニ及テ。富盛ニメ貨物

多ク以テ互市ノ勢漸々廣大ニ成リ。二國ノ禍必カラサルヲ以テ。二國共ニ此ヲ患ヘ。廣東港交易ノ吏ニ賄賂ヲ遣テ。諛ヲ構ヘシニ因テ。清朝ニテ甚ダ諸厄利亞ヲ疎ンジ。互市頗ル難渋ニ及ビ。乾隆年中ニ至テ。疎濶セラレ、利益益々甚シク。諸厄利亞ノ官吏等モ。清朝交易ヲ休ント欲スルノ評議アリシト云。然レモ。漢土産ノ茶ヲ諸厄利亞人ノ珍重スル。極テ甚シキヲ以テ。國王群臣ト會議シ。支那國賄ヲ以テ我國ヲ疎ズル。ハ支那帝ノ意ヨリ出ル。ハモ有ニシケレ。我國ヨリ別ニ使者ヲ遣シ。献上ヲ盛大ニシ。大臣ハモ進物ヲ豊厚ニ。交易イヲ願ヒ入ル。ニ於テハ。和親ノ調ハニハ必セリトテ。嘉慶帝誕生スルニ及テ。賀使トメ。諸厄利亞一國ノ名譽ノ智臣。

瑤兒ル鐸ト麻葛カ尔的テ涅イ乙ス正使トシテ其他天文地理医術工技  
物産等ノ学ニ勝レタル高明ノ士數輩ヲ選ニ副使トシ珍奇  
器寶書畫等種々ノ品物ヲ夥ク大船四艘ニ積ニ載テ清朝  
ニ聘シ北京ニテ至テ此ノ帝及諸大臣ニ獻ズ於是和親ノ  
厚ク調ヒテ交易ノ願成就セリ因テ乾隆帝諳厄利亞ヲ信  
ズルノ厚ク地ヲ賜リテ高館ヲ建シム今ハ廣東東港ニ於テ西洋  
諸國高館中イギリスノ高館最廣大美麗ニ嚴然タル一個  
ノ堅城ナリ後イギリス國王漢土ノ学ヲ明ニセシメテ欲シ人ヲ支那  
ノ学校ニ遣シテ学バシム故ニ往々詩ヲ賦シ文ヲ作ル者有ト云  
莫利宋モリソウハイギリス國良家ノ子ニテ幼年ヨリ学ヲ好シ材力絶倫

弱冠ニテ学校ノ教授タリ漢土ニ遊学スル一廿餘年曾テ五車韵  
府フイギリス語ニ翻シ自ラ序文ヲ作テ開校ス今其書舶来ニテ天文屋鋪ニアリ文武  
兼備ノ英雄ナルヲ以機要ノ役ヲ勤次第ニ昇進シテ當時廣東  
交易吏ノ都督ニ補セラレ又東南洋中ノ諸國處置交易等ノ  
事務ヲ帶シ五万石ノ禄ヲ食シ一千餘艘ノ軍艦ヲ支配シ三万人  
程ノ水軍ヲ撫御シ南海諸州ノ軍務ヲ總裁スル役人ナリ

右ハ諳厄利亞國ノ史記ニ載タル文ヲ節略シタルナリ若シ莫利宋  
自ラ来ル一有ラバ容易ナラザル一ナル當ニ駿豆相房上総等ノ  
海濱其心得ナクシバアルベカラズ

右元海按以下ノ文モ亦所謂蠻学者ノ家説カ若シ莫利宋来ル

氏渠漢字ニ通ズル者ナラバ聖賢ノ道ヲ以テ接對セシ心ニモ打拂ノ御旨ニ泥シヤ

○世ノ諺ニ君ヲ思フハ身ヲ思トカ謂ヘド吾渠ハ廿ニモ非カ問斯ニ將軍家ハ君上下均ク思ヘバ吾日本ノ諸臣ハ斯モ有タシ因テ左ニ其志ヲ顯ス金石林ノ往會ト悟レ

- 一八駿臺ノ公甫郎
- 二六寺島ノ中石隱
- 三六八洲ノ雙木史

所書ト成下並謹ク存洋見ル相モ大所新福沙ニ例レ成以承知レ所沙ハ所柳子ノ高クニ極ク作下並在畏ル知先刻トシ通クニ候カ引居ル知為ル所隣家同故物屋用防書ト内ノ承命ト一取ル所水氣ホ多ク在所檻以テホ

以減レシ給ル中ニ以テ有山屋在中ニ去カシテ弟モ亦レ在極レ以減レシ在レ習格利レ以減レシハ在在去カレハ在所屋也而中ニ在カレハ所先刻トシ中ニ在レ了執弟モ亦レ在少代等ニ在何カ所用持奉被ル所ニ在 十二月六日

物モ取ルル所年作方ノ所立カレハ有レ中家来レ候レ所所治レ致歸宅トシ中ニ在カレ 大所新福沙習内ノ所容神所伺トレ所事事トシ中ニ在カレ在悲沙也レ以減レシ在在取ルル所也城江所同カレハ中ニ在カレ大ニ所候ト有レ所上リ目カレ格利所平カレハ在替ル所トシ在入所在知レ色取年レ所容神後レ所事カレハ有レ所トシ事事在中ニ在カレ取ルル所在見

上より格別に業事なりとの御旨に承りて、  
存存上作 極月七日

此後書お覽は、  
秘の御指しを、  
心は、  
再行 即付 極月 十三日

○庵僧或日板刻せし能の番組ヲ予ニ示ス

# 五月廿三日於竹内能組

片山傳五郎  
石井仁兵衛 鴨目長兵衛  
賀茂 松田勘兵衛 清水半三郎 平岩作十郎

片山九郎右衛門  
熊野 東清左衛門 北股又藏 糟谷傳次郎 平岩十三郎

野村三次郎  
道成寺 松田勘兵衛 石井仁兵衛 近藤兵八郎 清水半三郎 平岩作十郎

片山九郎右衛門  
邯鄲 東清左衛門 三木弥三郎 小寺五左衛門 清水庄九郎 平岩加兵衛

野村三次郎  
夜討置我 三木弥三郎 平岩加兵衛 清水平七郎

附祝言



鼻取肉方

荒木幸太郎

止動方角

英武五郎

武惡

川嶋市次郎  
八木長三郎

闇罪人

茂山千五郎

道成寺間

川嶋市次郎

大藤内

八木長三郎

始り邪半剋

就テ曰コノ番組ハ今年ヨリ八年前天保四癸巳ノイナリ又竹内ト云處ハ京都東山南禅寺ノ門前ナル地予聞クコノ舞臺ハ常ニ在テ臨時ノイニ非ズト僧又曰コノ舞臺始メ豊臣太閤伏見桃山ノ館ニ建タリシヲ桃山引拂ノ片今ノ地ニ遷シ置ルトク又コノ番組板行ノ催主ハ禁裡ノ御医福井丹波守ナリト云

○京橋アタリノ名主ナヌミニ和田源七ト呼ンテ人ニ識ラレタル男ニテ短暗チカカナリ必シク文才モ有テ予ガ觀世ノ能ヲ見ル棧舗ニ時々推参メ話ル一日又來話中云フ君ノ近里ナル僧形ノ御隱居某モ年頃ノ御懇ナリシガ先頃首尾克退隱ヲ遂ラレモハヤ身モ自由ナリ進歌舞伎ヲ觀ニ往給フ其片ハ某ヲモ伴往レシガ棧舗ノ言ニ我コノ歌伎ヲ初

テ見タリ。世ニ負員ト謂フイ有リト聞ク。今ヨリ誰ヲカ斯ク爲シヤ。其  
 谷ニ世ノ第一ト呼ブ者ハ市川團十郎也ト言ハバ然ラバ述居ラレシト  
 話。予是ニ就思合セタルハ彼隱居甚伊達者ナ。今ニ始又風体ナル  
 中世ニ謂板榨編緬ノ紅ナルニ三升紋ヲ白ク榨出シタル杯。其餘煙  
 具ノ類。往々コノ紋ヲ觀ル。一咲ニ堪タリ。黙山子如何々々。

○前ノ六十九卷ニ奥州ノ深山ニ新通用ノ百文錢ヲ私造セシ  
 ヲ記ス。然ルニ百文錢ノ小判形ドゴテハ無ク。奥羽ノ間ニ金山在ルヲ掘  
 テ其純金ヲ以テ新ニ偽判ヲ造リ。私行ヲ企シト也。然ル故カ國替ノ  
 沙汰有テ羽州ノ酒井彦御譜代ナガラ。祖先ノ封國ヲ出ラレシ。若ク  
 其領内新金ノ故カ杯世ニ風聞ス。又或人ノ示セル一通左ノ如シ。

きい

佐竹若島支分  
羽州由利郡仙北村

検査

子五十二才

生約十三郎初行  
同州同郡桂坂村

石姓

三太郎

子五十二才

細工

改

同四十五才

三郎

同四十九才

酒井左ノ尉分

同州鉈海郡酒田

小石

民次郎

子四十五才

合

六郷支分

同州由利郡本庄城下

渡

常

子三十三才

細工

きく色

同族堤村 小島物屋 重吉 子四十二才

同族山崎和政人 菊地庄吉 同族人名

細工人

友吉 子四十二才

同

百姓分

幸吉 同三十七才

細工人

同族金浦村 石切徹 助 子四十二才

有之のたき子九月廿五日江戸忌

他同智院分 子三

六角屋改城下

延命店 内照尼

用意

増村 嘉助

名之年考

細文之助 吉吉

横河屋

作吉

造西屋

表助

きく色

吉四郎

船岡屋

小次郎

大木屋

吉吉

組次

末助

旗本屋

全次

同家中

園本 掃部

酒井左衛門 辰分

酒田 清

信吉 吉



○予叙術ヲ学ビコレヲ修スルノ餘傍ラ鍛淬ニ逮フ又久ク爲セ  
ハ外人モ聞テ乞需ル者アリ此項事ニ憑テ金三郎ヨリ内官ノ  
西氏ニ予カ爲ス所ヲ與フ迺各氏ノ答言是我曾テ誇ニ  
非ズ又所思有ルニ非ズ唯内官ノ面々予ガ如キ隱倫武備ノ任  
ニ居テ斯クモ日ヲ歴ルヤト思ハバ未ハ上聽ヲモ經ニ然ルハ則  
亦祖先ハ孝ナラント來者ニ憚ラズ其書文ヲ寫

駿州八丈保氏見  
前冊新見同之

金三郎極

少清奇

駿河書

略  
汝より百葉の巻を頼益の花園抄ありし根括お文は  
御の難きは合ふ事成抄は源河抄の中上極の書は  
程筆紙恐れ兼ふ大寶は代々譲物に可任と幾重に

有るし以沙流の中上極山君は此序に初有るし此補抄  
此大藏と作上と下極を頼益の白編緬二巻録りし中上  
此中上極を頼益山君は入河院なる所也此書は頼益  
○新見紙書の中上極大難の極子編緬二反括上極類は  
此大藏と括上と下極を頼益の書は此書は頼益の書  
中略  
○私伝抄極の文の中上極は頼益山君は作上と下極  
を頼益の書は

十二月十七日

駿河書極

在後

伊賀書

略  
晴昔より細書極の書は意の所極は如何に失敬  
より多羅以寛念と極の書は幸甚とありは頼益



ゆき見よ雪にも名のふかき

上巻

あまのこころのふかき

サスガ連歌ノ家業トテ自由ナル口占哉

○何かノ談ヨリ不計思出シタリ予ガ城下ノ坊ハ僅ニ六町固ヨリ  
 陋巷ナレモ其中ニ高有リ其子年十二三ニ盲ナリ善哉一呼  
 フ弦歌ヲ習フ姉アリ年稍長セリ亦弦歌ス或日其近所火ヲ失  
 メ炎殆ンド其屋ニ逮バントス姉癡亡メ起ツ一能ハズ善哉一ハ逃  
 ント為レモ駭テ行前ヲ分タス叫ビ曰ク姉我ニ負ハレヨ迺走避ケン  
 姉即其背ニ在テ行前ヲ告グ善哉其言ニ従ヒ走避テ遂ニ其難ヲ

脱ル説苑ニ載シ孔子ノ話ナル北方ノ獸蟹ト云カ足短ケレバ走ル  
 協ハズ因テ蚤々巨虚ト云足迅キ獸ヲ假テ騎逃グト斯ノ比ナリ

○前記セシ水戸ノ白石ノイヲ其年冬彼屋形ヲ訪申セシ同朋  
 運阿弥ニ問タレバ予ガ考察ノ若ク彼地白石ヲ生ズルハ勿論カノ  
 真弓山ト云ハ土中ヲ堀レバ悉ク其石ニ他ナシトサレバ彼大石モ格別  
 ニ得ラレシモ聞ヘズ成ルホド学校ニ立ラレシ碑ハ見事ナル巨石ナ  
 リト語レリ

又コノ前ノイニテ小石川ノ第三モ園用トメコノ巨白石ヲ取寄ラタリ然  
 ルニ此度在國ノ間ニ第出火メ焼タレバ人皆彼石ヲ取寄給ヒシ神怒ト  
 云觸セモ是レ採ルニ足ラズト又運阿語ル

○嚮ニ文政二年己卯越前ノ福井ニテ社倉勸諭録ト云施本出  
タリ後十三年ニ天保二年辛卯林家ノ一齋坦濟辰略記ノ撰有リ  
今茲庚子旧笈ノ内ヨリ觀出シタレバ爰ニ併録ス

越前福井社倉施本

社倉勸諭録

史善事を終ふことハ人を救ふより大なるハナシ人をして  
よハ錢鐘年にもさるるハ錢鐘ふあつてハ御記のり急  
に及ひしけし働くことわらハ子とて親もあつて  
食す親もあつて子とてごらむべ力なりハあつて  
かなら疫病を承るゝのにてはひおみちになさる死する

まのいゝぢとつあすもあはす減よあはれむぢかあ  
ひで死するなり世にたよのそんてか福て勇上もよく仁愛ある人  
ハ其力の及ぶ程ハ施救あはれむぢかあ  
志あるても其力及ぶ程ハ一時ハ救ひはとこすへ記をたてか

社倉社六連中  
のり倉

こゝにおひて考ふるハ古人のよめたまひ  
とい土産のりなり連中して土産をたてて記希敷を  
つたててえさん人をすくはんためのをあてなり  
あや世のよまはけもすくはん國の費にもすくはん人を  
救ふは救方なり其は方ハ連中をこゝらえ一人前より一月に  
錢一匁つとよめあはれむぢかあ一月よ三十文なり一年に三百六十  
匁なり連中百人なれば一年よ三十六貫文あり千人なれば三



百六十貫文なり、世千人して十年の間つゝもる時ハ三千六百貫  
 文なり、これを報よをもハ大略三十五貫目なり、まづ三十  
 五貫目の報あきハ高直の米もして、口而斛むかりハかこ  
 ちうり、世米をりて、饑饉の時粥をにして、施を  
 して、ことに方く、心にあひて、みなそれく、よ連中して  
 施を時ハ幾千万の人衆を救ふも、こゝろえう、功徳善  
 行の大ある、これホ志く、のあ、こゝろ志ある、人いたう、い  
 ら、のらして、世の中、に世社会の法を行ひた、毎へ、  
 ○一日ハ一文の銭ハ、貴賤とも、に何となし、とも、ほぶるべ、なや、  
 一杯の酒を減しても、七文の銭をほへ、一飯の菜を減しても

一文の銭をうべ、忘るよ、知味よ、ちうとあり、め、美徳よ  
 力をつ、めども、人よ、ほど、こする、このま、或ハ、金銀多  
 け、たく、をえて、世を、ごせども、子孫よ、いかりて、其家、だん  
 せ、跡、方、な、起、ま、の、今、も、む、う、な、め、か、う、た、云、  
 ○金銀よ、う、ま、う、す、我、力、勝、ま、の、る、の、こ、する、い、これ、を、利、を  
 め、つて、利、と、す、とい、ひ、この、力を、ま、ふ、ま、う、も、人、の、為、と、なる  
 る、と、も、る、い、これ、を、義、と、り、て、利、と、す、とい、ふ、と、大、学、よ、め  
 せ、た、め、へ、り、云、く、

○より、お、り、の、ひ、考、ある、よ、を、後、とも、に、一年、の、うち、無、益、の  
 幸、に、費、す、銭、つ、の、い、く、ら、も、あ、る、べ、し、法、と、り、て、これ

らの費をいぬめたるを希よ以て一杯の酒をげんして  
 七文の端をうれハ、社倉の端一文をよけても、かへつて六文  
 の益をうるなり、かく物ごとに人々専ら心を用ひば、その  
 益をうるべし、故、志うれハ社倉の益をいぬめよ、加入せざる事  
 かくさるるもあらず、ことにこれる人も共よ益をうら陰  
 徳を新の根本ともいふ也、

一社倉藏多かよ、以、所のまり、次、徳人とも、に、由るす、所の  
 有徳の人よ、所のけ、益、何、時、よ、そ、も、指、支、あ、く、用、を、辨、せ、る  
 極、よ、と、う、る、べ、し、を、多、く、つ、も、れ、ハ、米、穀、よ、て、た、く、と、え、益  
 べ、比、る、第、一、の、極、あ、れ、バ、米、穀、と、も、に、出、納、受、取、立、合、封、印、ホ

にい、て、る、ま、で、身、う、ら、も、た、く、の、な、る、人、を、え、く、ハ、法、事、嚴  
 重、よ、い、ら、げ、べ、し、い、る、の、な、り、

一社倉藏の義ハ、立合封金よ、て、あ、つ、け、ひ、る、よ、ゆ、得、ハ、利、是、の、由  
 法、を、犯、す、勿、論、な、り、を、社、中、社、外、せ、よ、借、用、と、申、す、う、ら、く、  
 禁、制、た、ら、ん、

右社倉の事ハ、齊家寶要といふ書の中よ、米文公の社倉  
 記よ、お、つ、き、て、社、倉、こ、ろ、よ、志、々、一、多、れ、ハ、志、あ、る、人、ハ、か、の  
 書、に、つ、い、て、熟、覽、し、た、め、あ、ら、ん、と、い、ふ、こ、と、志、し、り、

文政二年己卯閏四月上辭

今、あ、ら、あ、よ、お、い、て、社、倉、社、倉、中、作、留、也、加、入、の、所、方、候、ハ、毎、月

海日、書林會津屋まき、ゆ出候一と、將又他、地方に於ても、  
沙同志の沙方候ハ、沙連中、沙促と候、まき、こころ、まき、これ、  
候、柳、所、者、作、候、まき、

月日

社倉幹事

書林

汲古堂

越前福井西米町

會津屋清右衛門

濟敷略記

民ハ邦の本に、食ハ民の天なり、其の故、先王の政、食を  
三、三、民を養ふ、まき、これ、漢土の古より、三年耕  
して一年の食と候、十年耕して三年の食と候、三  
十年耕して十年の食と候、早乾水溢の憂あり、まき、

民菜を乃患なき、其の備あり、まき、春秋、穀國の  
時、王政衰微、まき、列國を以、倉庫の豫備あり、飢  
歉の時、民を賑恤、不足を補ひ、不給を助け、まき、隣  
國糶糶の幸、往々見へ、まき、此、三代封堯の世、  
民間、まき、令、た、まき、此、三代封堯の世、  
盛衰あり、まき、此、三代封堯の世、  
同、此、三代封堯の世、  
のあり、まき、此、三代封堯の世、  
民より記りて、將相も、まき、又、致は、まき、  
歸る、まき、此、三代封堯の世、

多しといふも世禄のものゆゑかゝり、其等の流産無きは、  
 其國々の臣僚なり。耕さずして食ふもの、穀おのつ  
 うら多かりしは、郡縣の世より、民百も穀を  
 獲てむるも、其勢ひなり。易起るなり、漢以後隋唐  
 宋元より至るまで、常平義倉、社倉、平糶、折中、廣惠、豫  
 備の倉法、陸續と起きり、あれ封建郡縣の古制よ志  
 ためて、知るなり。今我邦よかいて、郡縣の古制漸く  
 衰り、其名を存するのこゝろ、群臣百辟封建の實を  
 せり。知るは、儒蓄農民の政より、あれを三代封建  
 の志意よ、知るなり。今、漢土郡縣の制よ、倣ひ

難なり。知るを儒者徒く、義倉社倉なり。今もなき、  
 良法といふは、人之勸むるものあれ、其法を三代の  
 時より、下を養ふの法よ、あれ。民情よあつて、  
 和あり、和あり、抑我邦、沃土多かり、土穀善く、  
 今よあつて、何の不足あり、今も漢土の中古以後、  
 比を、八耕さす、食ふもの、たゞ十倍のこゝろ、  
 天朝 幕朝の百官の外、大不列國おのゝ、  
 あり、又、其社の穀、幾十萬なり、  
 して、食ふもの、食ふもの、農民のよ、  
 知るを、知るなり、民間よ、穀をたぐり、  
 三石 三石

るハを三代の言といふ魚んや物さハ今の人といふ  
 といふは儉徳とつゝ華奢の用を省れをといふ  
 湖や豫備の倉米を並め一先臣僚たるものも亦よろ  
 人之の意を體一といふは衣食を減一斗升の微を  
 ばして人之の物や平日民よをさるゝの恩を凶飢の時  
 報の魚さなり是上のものも民をさるゝの物さなり  
 王政の盛なりはよははと心もあはれをさるゝこと存を  
 といふ一扱げ教をさるゝと令得ありてさるゝさるゝ  
 ていふ法を設けらるゝに至りては當今の世をさるゝ  
 らの社會の意味とも考へ風俗もさるゝ有るなり

一王制は三十年の過を以てとりて三十年之限と立  
 ハ何れや世の字ハ二十の尾を曳くと云ふて二十年  
 と一世と人世一變の期をいふなりまゝ二十年と二  
 合せて六十年をいふは成甲子一周天道一變の期と  
 九北と三十年前後をいふは凶歉あり六十年前後を  
 大凶歉あるは是天運の消長をいふなり丙午丁未の前  
 後をいふ古來往々有事ありその漢土も丙午丁未  
 澁といふ書ありて丙午丁未の災を集記ありたり  
 我邦も丙午丁未の災を集記ありたり  
 享保十七の飢荒ハ丙午丁未の災を集記ありたり



無<sub>レ</sub>記<sub>レ</sub>す、勿<sub>レ</sub>注<sub>レ</sub>よ、無<sub>レ</sub>く、其<sub>レ</sub>流<sub>レ</sub>録<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>し、其<sub>レ</sub>意<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>て  
 其<sub>レ</sub>君<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>さ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>助<sub>レ</sub>け、平<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>民<sub>レ</sub>功<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>益<sub>レ</sub>ひ<sub>レ</sub>さ<sub>レ</sub>う<sub>レ</sub>く  
 其<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>恩<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>報<sub>レ</sub>ん<sub>レ</sub>との<sub>レ</sub>志<sub>レ</sub>あり<sub>レ</sub>ん<sub>レ</sub>なり、其<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>君<sub>レ</sub>臣  
 揮<sub>レ</sub>合<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>積<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>故<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>は、數<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>守<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>數<sub>レ</sub>は  
 至<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>處<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>も、其<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>さ<sub>レ</sub>か<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>守<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>、其<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>飢  
 歎<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>海<sub>レ</sub>き<sub>レ</sub>も、其<sub>レ</sub>は、志<sub>レ</sub>うれ<sub>レ</sub>も、年<sub>レ</sub>貢<sub>レ</sub>定<sub>レ</sub>數<sub>レ</sub>の  
 外<sub>レ</sub>、民<sub>レ</sub>百<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>統<sub>レ</sub>よ<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>ん<sub>レ</sub>、其<sub>レ</sub>は、厚<sub>レ</sub>歎<sub>レ</sub>よ<sub>レ</sub>頼<sub>レ</sub>して<sub>レ</sub>上  
 する<sub>レ</sub>もの、本<sub>レ</sub>意<sub>レ</sub>よ<sub>レ</sub>あり<sub>レ</sub>ん<sub>レ</sub>、上<sub>レ</sub>よ<sub>レ</sub>つ<sub>レ</sub>くる<sub>レ</sub>米<sub>レ</sub>を  
 民<sub>レ</sub>百<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>倍<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>記<sub>レ</sub>録<sub>レ</sub>ひ<sub>レ</sub>ある<sub>レ</sub>もの、其<sub>レ</sub>は、倍<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>海<sub>レ</sub>と  
 融<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>、昔<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>倍<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>、い<sub>レ</sub>う<sub>レ</sub>この<sub>レ</sub>海<sub>レ</sub>米<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>融<sub>レ</sub>

せ<sub>レ</sub>し、元<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>合<sub>レ</sub>意<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>守<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>、其<sub>レ</sub>は、兩<sub>レ</sub>煙<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>、其<sub>レ</sub>の  
 其<sub>レ</sub>米<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>倍<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>、又<sub>レ</sub>凶<sub>レ</sub>飢<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>備<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>あり<sub>レ</sub>ん<sub>レ</sub>記<sub>レ</sub>録<sub>レ</sub>なり、既<sub>レ</sub>本  
 君<sub>レ</sub>臣<sub>レ</sub>よ<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>して<sub>レ</sub>艱<sub>レ</sub>苦<sub>レ</sub>して<sub>レ</sub>積<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>もの、其<sub>レ</sub>は、民<sub>レ</sub>も  
 其<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>誠<sub>レ</sub>意<sub>レ</sub>よ<sub>レ</sub>感<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>う<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>始<sub>レ</sub>す、其<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>海<sub>レ</sub>米<sub>レ</sub>ある  
 とも、利<sub>レ</sub>息<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>故<sub>レ</sub>も、其<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>、其<sub>レ</sub>は、其<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>こ<sub>レ</sub>こ<sub>レ</sub>誠  
 社<sub>レ</sub>倉<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>法<sub>レ</sub>よ<sub>レ</sub>頼<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>も、年<sub>レ</sub>竟<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>ほ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>記  
 其<sub>レ</sub>は、謂<sub>レ</sub>ひ<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>供<sub>レ</sub>進<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>民<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>倍<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>勞<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>も  
 然<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>意<sub>レ</sub>よ<sub>レ</sub>ち<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>、其<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>記<sub>レ</sub>録<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>。  
 一<sub>レ</sub>濟<sub>レ</sub>敷<sub>レ</sub>鞆<sub>レ</sub>置<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>法<sub>レ</sub>、其<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>基<sub>レ</sub>本<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>あり<sub>レ</sub>、十<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>て  
 小<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>、二<sub>レ</sub>十<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>も、三<sub>レ</sub>十<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>よ<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>也、一<sub>レ</sub>變<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>る





人君の徳業と、民の世へ米とよそ積むをれとも、民  
 の方とよあらしむとかなんうらみうくのめくして又  
 五年と強て、初十年よ五穀ハ、飢饉の徳業となり、  
 大抵の凶飢ハ、もくあへて、これをお威となすあり、又十  
 年と強れハ、この徳業を言て、いふなる凶飢をも決  
 して一人の徳業を言のめくは、二十年を  
 以て大威といふなり、二十年の後、三十年の内、初を  
 第一凶荒よ起る時ハ、年々の倉廩を傾けて、これ  
 ぞ賑恤、徳すあり、これハ、人君が意の  
 あるをれなり、其後よ及びて、再び初發の法を

あげ給ふなり、幸ひよ凶飢もなき時ハ、もとの姿よ  
 増益をり、これハ、又年敷を待て、凶飢あり、是  
 徳へうらむけを以て救ひあり、是れ、初發の  
 法よ返す徳なり、

一世法をあげ給ふなり、是れ、先づ親民の官吏と  
 選を會し、徳く人君の仁意と會得して、其振ふる肝  
 要なり、是れ、初發の法なり、民へ徳く、初威よ返して納  
 むるの法、米子の社會も、このめくあり、王安石乃  
 昔、苗法と名かり、是れ、苟も慘怛忠利の心を以て、これを  
 初も、仁惠の政と成る徳なり、聚歛亟疾の意

を以てされ、民を害す由多しの法もて民を害するに  
至る、則ち苗の法よりこれを一邑より移す人も、これを天  
中より移す人も、これとひとしく、まかり、此れ民を一時の  
便と謀りて、後の患を言ふ、その言も、其の言の便を  
表して、秋の凶沛は苦と辨へ、方あるも、其の言有るは  
その撫字心算、催科政拙の心を、保く、情實を  
考へ、強ておさへ、これ法外の深意あり、又五年の  
後、基本立、然るに、米の法を存するも、其  
間、其民の私め、んるをも、官教を貴く、  
ひ、私利を、深、弊を生、風俗を傷るの

を、心、固て世法を存、其、  
う、あ、お、漸、米、  
く、これと存、法中の深、  
と、然、あ、ま、  
を、ま、ま、或、借、米、と、然、あ、  
た、多、その、時、ま、こ、り、て、の、お、扱、ひ、方、も、あ、る、  
危、角、も、人、と、ほ、る、と、緊、要、と、す、  
一、濟、敷、の、場、お、代、官、役、お、攝、の、内、へ、建、  
納、と、嚴、お、非、常、と、戒、  
時、を、常、年、と、害、あ、る、  
凶、飢、の、年、よ、至

一、濟、敷、の、場、お、代、官、役、お、攝、の、内、へ、建、  
納、と、嚴、お、非、常、と、戒、  
時、を、常、年、と、害、あ、る、  
凶、飢、の、年、よ、至

りて地録の民を劫掠のそのありきし死するあり  
されハ役も過重ハ嚴重ニ建屋魚をさるなり  
一濟穀粟米の如く何れも其食よありの魚も物多  
よかきハ民よ令して能くハ魚をさるハ穀穀を  
勿論其外米の實粟の實漢もよハ海菜干物  
塩物の類なり濟穀の過重判よ物益と建てその  
ありと納免おうハむも可なり  
右ノ記を熟ハ濟穀建置の大略なり國よ従ハ俗よ  
固里一標成る魚ハたハ世大意よハつ起て増損  
斟酌をさるる其君や有司よハさるもの

天保二年辛卯十一月

佐藤坦録

○書牧誓云王曰武古人有言曰牝雞之晨注惟家之索

索ハ蕭索也ト云  
意ハ衰ハ蕭々  
ト謂フコト也

蕭索也牝雞而晨則陰陽反常是為妖孽而家道索矣將紂惟婦言是用故先此斯文ニ言シ牝雞ノイモ此

註ノ如ク固ヨリ違モナケレド予ガ後庭ニ飼置ケル雞ニテ言

伸クキ一有リ其云云ハ雄鳥時ヲ告ント為ル前ニハ必ず牝雞

微声ニクウクト鳴ク思フニ時ヲ告示スガ如シ然ルハ忽雄鳥

翼ヲ振ヒ大鳴メ時ヲ叫ブ一數声コノ中牝雞ハ雄鳥ノ側ニ伏

添メ無鳴唯隨フ其謹状見ツベシ是ヲ觀ル中ハ書ノ牝雞之晨

ト云シハ眞雞ノ状ヨリハ上ハベク云フ也博祭々々

○久昌夫人ハ母儀ノ德坐シ且御慈悲深カリシハ人モ能知ク

リ。又今予が住ル別荘ハ其頃ハ林樹モ密ニ今ノ稻荷祠ノ處モ  
幽邃ナリシ。因テ世ノ所謂稻荷ノ使者ナル野狐モ此アタリニ住タリケシ。  
近頃予病中看侍ノ妻カ聞傳ヘタル話ヲ語ルハ夫人何ナル御下ニヤ。  
夢想ノ御下有テ彼稻荷祠ノ使狐ニ綿ヲ与ヘラレタリ。然ルニ其後  
夫人稻荷祠ニ參詣有シキ。母狐ト覺キカ。雛狐ニ三ヲ率ヘテ夫人ノ  
詣前ニ出タルヲ人見ルニ雛狐各サキニ母狐ニ与ヘラレシ綿ヲ其頭ニ戴テ  
有リシト。何モ夫人ノ御徳鳥獸ニモ及ビケル下ノ予モ忝ク聽タリ。  
又夫人御生前ハ此邸ニ坐シタレバ予ハ淺草ノ邸ヨリ此邸ニ至ルニ或時ハ侍  
婢ニ命セラレテ彼者ニ食ヲ与ヘヨト聞キタレバ我何者ニヤト問申セバ狐ナル  
ガ能馴レテ縁前ニ來ル也ト答給ヒキ。傍々前話ト想ヒ合セヌ。

○東都ノ郊外堀内ト云ニ祖師日蓮上人ノ堂アリ。諸願祈テ驗アリ  
迎都下ノ人遠路ヲ參詣ス。又此邊ニ熊茶屋ト稱スル店アリ。  
其稱ハ生熊イナクマヲ飼置ケバ也。又此店ニ一ノ娘アリ。容色世ニ勝レタリ。サ  
レモ痴頓チトンヲ至愚ナリ。唯ただ「この狐のまゝ」ト謂フヲ覺テ誰シレカレ漂トナク  
茲ココヲ以テ答フ。上のこの狐のまゝとハ其頃流行リノ言葉ニ好言趣意ノ謂ナリ。又此女ノ美色世ニ絶タレバニ  
三ノ諸侯納テ後宮ニ置ニ十日ヲ經ズメ出シ返ス。全是至愚ナレバ也。然  
ルニ此女ノ美ニ仍テ此店來客断ヘズ。殆ド錢ヲ得ル下千萬トス。熊モ亦  
來客ノ爲ニ置ケバ。始ハ熊ニ因テ來客有リ。女出ルニ及ンテ熊ヲ觀ル者  
稀ナリ。斯カル故ニヤ。或日熊押ヨリ出テ其女ヲ害セリト。是等ハ仇ニ酬  
ノ比ニ。何か因果報應ノ事ナラン。

丑辛

○旧冬ヨリ。大御所公久々御不例ニ坐シタルカ。御掛念申上ル御容体ニモ非ズ。然ルニ。又此正月十五日ニ。昌成カ連哥モトニ文音セシ返辞ニ。

大御所様御不快ニ付。御祈禱ノ御連歌被仰付

タリ。杯云答フサレバ。斯ク御祈禱ノ連歌ト云フハ。我輩ニハ不審也。何ナル譯ニヤ。

丑辛

○世俗大小ト呼ンテ。其歳月ノ大小ヲ板刻メ人ニ施ス。又其一紙ニ。諸節等ヲ加記ス。今茲其奇ナル者ヲ見ル。

文通ノ式ナリ。其圖。

○天保十二年ナリ。  
大ノ月ハ。  
閏正月。三月。六月。  
八月。十月。十二月也。

○辛丑。歳徳明方。  
巳午ノ間。  
○当年ノ節分。  
正月十三日。  
明年ノ節分。  
十二月廿四ナリ。

七背

天保十二年丁酉	
大月閏ノ心様	十一ノ心
三六八十兵衛様	

表

一筆以上は惟先以

御明ノ方様巳午ノ間。若徒上歳心堂。同知友。存お作。然考節分ニ進様。正月十三日。十二月。

○春、彼岸、閏正月  
廿六日  
秋、八月六日

○十八夜、三月十日  
入梅、四月十八日

○半夏生、五月十四日

○雨、宵二日、酉八刻

○百十日、七月十日

○十月七日、玄指

○冬至、十一月十日

○寒入、十月廿音、卯  
二刻

○二月九日、初午

右ヨク云協入タリ

廿四日、雨、玄指、申、程、又、御、徳、居、彼岸、院、極、成、  
三月、廿六日、御、入、方、八月、廿六日、色、御、遠、毎、上、於、此、生、  
三月、十日、音、ま、八十八、極、し、以、賀、上、於、所、祝、此、身、  
娘、作、由、る、し、四月、十八日、考、在、出、極、し、作、下、難、  
有、在、好、片、同、取、半、夏、生、初、了、し、五月、十四日、  
波、出、之、儀、的、在、六月、六日、出、用、向、有、し、其、後、  
出、船、し、積、り、出、生、し、七月、十七日、二、百、十日、之、風、也、  
其、中、望、作、り、早、く、急、船、に、取、成、一、百、廿、日、十月、

七日、玄、指、し、以、祝、儀、例、年、し、色、し、為、御、坐、此、子、息、  
老、至、即、極、也、十一月、十日、音、以、元、服、殊、以、極、談、  
お、究、中、以、身、十一月、廿、音、重、し、公、卿、以、引、移、し、中、  
同、出、身、を、好、作、也、右、し、以、笑、為、也、早、く、以、世、此、生、ん、  
恐、惶、極、之、

丑、二月、九、初、午

○小鼓、觀、世、新、九、郎、が、家、寶、二、羊、皮、ノ、鼓、有、リ、傳、來、ヲ、聞、ク、三

台徳公ヨリ賜ル所ト云。故新九郎豊語レルハ。此鼓時ト不機嫌  
ナリ有リ。予問フ。何シカ不機嫌ト云。曰フ。或中官ノ御能白。某  
賜能ヲ打キ。調レテ曾テ鳴ラズ。為方ナク代鼓シ以テ其能ヲ打シ  
カ。不審暗クメ。御能畢ルト。樂屋ニ入テ打三ニ。其音亮亮トメ甚  
好シ。因テ知ル。此鼓不機嫌ナルヲ。頃日。當新九來ル。就テ復其  
ヲ問フニ。違ハズ。何ニモ前言ノ如シ。又此鼓皮黔色。尋常ノ鼓ト異  
テ。見ル所美ナラズト。

又云。新九ガ家モ古キ者ニテ。織田右府信長モ。渠ガ弟子ナルヲ。  
紫調記ニ見ユ。予言フ。信長ノ擊鼓ハ。何ナル調子ゾ。

右ニテ思寄ルイ有リ。新九郎ガ家モ仕合ナル者ニテ。第六。台徳公

御指南ヲ申上ケ。是ヨリ下リテモ。何ノ御時カ。公上ニ御指南申上

タルイ有リ。今ノ新九ガ祖父休翁ト云シハ。退隱剃髮メヨリモ。御用

ニテ。御舞臺ニ剃髮十徳ノ下ハ長袴ヲ著セルカ。次ニテ出。四囉子ニ列シタルイ。

度々ナリシト。借上ノ御自ノ御鼓ノ調緒ハ。浅黄ニ。尋常ノ紅調ハ

勿論鼓者免許ノ紫調ノ比ニ非ズト。予竊ニ云フ。劇場ノ囉子ニ用ル鼓ハ。総テ浅黄調ナリ。是等最下ナク。却テ

最上ノイニ嫌ナキカ。又聞ク。上ハ御指南申上レバ。御鼓御預ト云イ有テ。御用ノ

御鼓ヲ其家ニ預リ奉ルイトゾ。其上他處ハ能囉子有ル中。持行テ打

イモ御構ナシ。因テ若シ外ハ其技ニ往中ハ。大名ノ邸ニテモ。御鼓ト呼

ベハ。即其正門ノ両扉ヲ開テ入ラシム。又能囉子ノ中ニ。其始ハ。御鼓ハ。臺

ニ載テ。已ガ前ニ置キ。始レバ。臺ヲ外シ。常ノ如クメ打トゾ。官上ノ御威光

三ノ番

コニ觀ルベシ

○聞ク。毎年ノ正月七日。淀侯ノ稻葉丹恒例トシテ。鉦始ト云フ  
有リ。其前夜ヨリ。大ナル平桶ニ水ヲ湛置ケ。大抵寒氣ノ頃  
ナレバ。氷ル一一面ナリ。然レ明早コレヲ碎キ。來會スル諸工匠ヲ  
裸體ニメコレニ浴セシム。諸工其冷ニ堪ヘズ。サレド後ノ酒饌ニ志  
アレバ。此苦ヲ忍シテ嘉例トナス。果レ後ハ大ニ宴メ。醉態坐ニ  
満ト云。何ニモ異ナル祝ナリキ。

○嘗テ小臣ニ山田某ナル者アリ。其僕田舎者ニテ有シガ。或片食時  
ニ菜汁ヲ設ケタルヲ。山田食シタルニ。半バ食スル中。齒ニ觸ル者アリ。吐  
テ見ルニ芋蠟ヲ半バ截リタルナリ。山田怒テ曰。汝奚少斯ノ如キ。僕即

應ツ半截尚有リ候。山田竟ニ笑フ。

又或日山田索麪ヲ食セント。彼僕ニ命ズ。僕迺熟テ皿ニ盛り來ル。山  
田食シ盡メ見ルニ。麪ノ底物アリ。熟視ニ天絲瓜ノ乾皮ナリ。コレ山田  
ガ足ノ痒ヲ搔者ナリシガ。俱ニ熟テ啗ム。山田恚ヲ變メ。愕然。





